



和訓栞

多之部

十四

津田文庫
文庫 1
1604
15



倭訓栞前編十四

洞津 谷川士清 纂

多の部

た 手とたとよむハ通音也○田の音の略〜〜〜訓あり〜〜〜秋名と也
 耕田と〜も平らの義あり〜予は山田門田津田沢田池田漆田濱田寺田
 荒田荒小田小山田川田ふ〜よあり○史に勸字田要割田發開田乘田易田割田
 一身田荒廢田ゆり乘田も割田も同〜〜を令義解は公田者乘田也と也
 ○田令は位田職分田賜田口分田ふ〜も別勅賜入田者名賜田とあり○
 忠とたとよむハあとの略也古事記に訓ハ尺云ハ阿多と〜え〜り尺ハ咫の儀
 あり〜○誰かと略〜〜た〜もい〜古事記の予はた〜とも尺〜り
 誰と也何と〜〜あ〜〜○當黨岩成たの假名は用う又囊成たの假名
 〜〜又ふは用う

△たあ

△たいま 日本紀倭名抄は當麻と讀り又日本紀古事記はたま〜も〜もカ

倭訓栞 卷之十四

祭集は山城相樂郡の布當と云ふといふも同し○たいまらひ履仲紀の字も也

たいし 倭名抄は舵とよめり古事記は當藝斯形といふ是也といひ船尾は存りて船と正と木の柄の曲まる物状指り日本紀よりかちとよめり抄は今案舟人呼扱扱為舵師是といふ漢語扱は舵船尾也といふ也○五節は大師局はり雲圖扱といふ也又小師あり

たいし 大己貴の音也俗と負龍使使つるハ舊事紀より元軍神といひ神功紀よりより伊勢は黒谷の類聚本源は大国玉也といひ○大黒天神ハ儀軌と考ふるは頭は帽子と蒙りた利は囊袋より右手は楯印とたすより○摩竭持楯飽餉持袋といひ此二鬼と合せざる也何葉に載しむ

○河内國古市郡大黒村は自然石の大黒沢出と大槩其長五六寸許也煤けざるか黒し大黒寺はり古刹也式の大社於賀美神社も此村にあり○万葉集は黒者蒼鷹之名也といふ○大黒天のハ南海寄歸傳佛祖通載等より新譯仁王經に紀塚間摩訶羅大黒天神青龍疏に

大黒天神闘戰神也といひ○三面大黒鼠袋大黒ハ聖宝藏神經に宝藏神身黄色二臂三面云云右手持海甘子左手持鼠囊といふ也○大元帝師祈摩訶迦羅天勝軍ハ佛祖通載よりいふ

たいかふ 棋圖の父まゝ人の称也太閤といひり落髮したまひ禪閣と称す○謙信ハ五箇圍は手との信玄ハ八箇圍は手との信長公ハ十九箇圍豊太閤ハ天下一統といひてかほまれ也

たいし 中古以来大材と大物といふ事東鑑太平記ふといふも今も難産ふといふに大おひくといふ是也訓をわねといふもいふ也○東鑑は載柱一本之車駕牛百二十頭令牽之東大寺建立の料也といふも又大白山千佛閣記は日本國千光法師榮西百圍之木九若干致致して事済といふ也○大物の城ハ攝津はり河邊郡大物浦也

たいし 太守ハ親王と称する所也天長中は始以上總常陸上野三國為親王任國改守曰太守と三代格よりいふ

所近邊射教白尊女北面下鴈源鏡所從所為と云々百練抄延久四年藤原仲季勘罪名配流土佐國於齋宮邊依射教白尊女也と云々又宇治拾遺に瓶乃いひしはたうめやふたふくせんといふれは此をいふ河原のよや

たうつ 大鏡徒然草ふくはるも攤方の名倭名抄よせうちといふは詩よ白晝攤錢高浪中箋注に攤錢蜀人賭錢之名と云々

たうやく 紫式日記に膏藥とかく香の公事根元よもか三日よは御うやくはまると云々ゆ千瘡膏也といふは独參湯と云くぶん湯といふはやく忌よるはよや○當藥といふはまも右のまよるはやくうやくといふは酸摸の一名當藥といふ別也

たうぶく 衣纓家の襲服といふは道服と云り其製直綴と云お近しと道家の服也野服の制は似る事鶴林玉露よんより水戸義公の新製せしる所の道服ハ深衣深衣隱括せる者也○元正紀に禁剪髮髻髮輒着道服貌似東門清妓奸盜之輩といふは僧衣と指るは○堪囊抄よ

馬止ひ着て草むら塵埃を防ぐ者とも道服と名くといふは道路の服也今羽織と称するもの此制ありといふは今も木綿羽織と道服といふはたうき 胡曹故に當色に位色といふも是也衣服令義解よるも又當色乃如木もりのといふ

たうがわり 日本紀に似字を訓せり○給字よめり催馬樂よるはたうがわりといふも是也源氏よまのゆたうがわりといふも三宮の年給といふ年爵といふはたうまやう 堂上と云りも播紳家の称といふは明津も西京堂上文職といふは正官と堂上官といふは將東略抄に昇殿と云るはこれと堂上といふはゆりともこれと古の殿上は供奉する官は堂上といふは庭上よて事をなす官は地下といふはもといふは堂上と堂下よてを賤と分るは莊といふ

△たうる 絶とよめり万葉集よ不絶とたえと云りたえてたえまふといふ皆えの假字も一○殊とたえてともむも同又古今集よまてといふはいもかといふを六帖よてかといふはいもめりいも

一〇〇 何ふるの絶てしぬくの故に絶て極のともは致成ふまで流出られ
しものとも也

△たどり 万葉集は高山の峯乃手折と云ふなりたはは同しと云ふ通せり
新撰字鏡は嶼を山のこたまりと云ふなりと云ふなり又嶼と云ふ
成りしも成りしもよありたは太の語も又さくたと通せり〇万葉集
よちちた成るたむの山とつりり古あ成たむむ成るといふ梶列折
てふといふある是也といふた例の発語とするも通す

たどやめ 神代紀は婦人又女成より皇代紀は手弱女人と書せり益荒
男はむらじの稱謂也たやてよとの語也よ日本後紀の事及万葉集は
たどやめともよありと云ふと通する例あり

△たり 鷹と云ふたけそ也鷲猛成稱を或いさくおとのふれは名く西土乃
鷹揚のこと也といふなり蝦夷はこがらふといふ〇倭名抄は黄鷹はくく
一歳の名也大なる老成大鷲と稱と白と云ふの成白鷹と稱と三歳の名也
といふなり大鷲は朝鮮より来るといふ天武紀は東國貢白鷹と云ふなり万葉は

矢成尾のま白鷹をやくにすゑかきてつらうく釣くしよと云ふ

〇源氏は養人下の名をいふ鷹飼は養人下の被官也御鷹は足草御免草
成用は装束以下常は異れは諸人對する時と後あり〇古事記は鷓鴣成
よめり廣雅はよめ鷓鴣也倭名成のせといふ〇嶋は雄より大なる成も
て大の音とよめ諸鳥は異れは或は弟鷹の音轉雄成せといふ兄鷹の音
也といふ古樂府は豹則所身鷹則鷓鴣と云ふ〇信濃國諏方大明神
御贄鷹といふ事東鑑はよめなり〇古は雉及小鳥の成取しむ雁鷓鴣と云
ふ近世の本也といふ其鷓鴣捕老成鷓鴣の鳥と稱して此成愛す〇
月令は二月鷹化為鳩といふなり〇天竺は鷓鴣といふ〇一條帝の時一の鷹雛
ひ契丹は鷹鳩といふ高麗は鷹雛といふなり〇一條帝の時一の鷹雛
成得より逸物といふなり鳥成鷓鴣成識と信濃の士人豊平ある者視て奇
雙の雄姿成歎して曰成鷹の父鷓鴣といふなり母は鷹也よめま魚成釣て
後鳥成捕えぬ鷹本性成得んと竟は希代の鷹と云ふなり古今著聞
集はよめなり今も鷓鴣の子ありといふ〇ひちの郷は田圃成り受と云ふ

とてひらの檢校豊平といせう事也とあると高遠の辺は非持といふ村の
其地あり伊奈郡也○上古の名鷹天智天皇の磐手乃野守延喜御門
の白兄鷹一條帝の鳩屋祐鴨後一條帝藤花韓纏藤澤山家等也月輪鷹
といふ愛宕山腹大鷹峯の月輪寺にて綱せし也今下野國宇津宮より出
る若必逸物也といふ○鷹の死をしのぐ穂をつまぐといふ諺に李白の詩に鳳
不啄粟所食唯琅玕といふも同○鞍馬より出す鷹の羽ふとてかきけり
若しやうり○鷹の羽を惜むは名を惜むといふ説花は君子愛口虎豹愛爪
といふも同○鷹嶋肥前松浦郡に属す明人五龍山と名する是也といふ
弘安四年元賊船大風を値て此處に漂流し其兵悉く溺死せり○鷹巢所
の名よとんゆ○名は擧成すめり擧國あり尊成よむ尊氏ありわく山
武尊山とあり○田産ようう幾やうといふ高の字也
たかろ 珍寶といふ田カのみか一公民とわかんたうといふ訓を詩よと様橋
惟寶といふう○生鬼成たうといふいりかお成よみうう今と北伊勢
の俗に送れり○寶寺とい訓郡山崎にあり今宝積寺といふ

たかろ 高字成よめり神代紀に崇よめり○賣買またかやとていふ
漢書に貴賤をよめり種う書よめりいふといふ○名は孝成た
うといふは孔安國の孝經乃序は孝者人之高行といふよめり也とい
ふ○たうの漢の和泉大島郡也靈異記に高脚濱に依り脚とてこと
よめり持統紀に高脚海といふたう乃山三河遠江の邊にあり高師里
ハ伊賀といり
たかみ 神代紀に頭をよめり柄頭といふ古事記に手上とてえり今つ
うといり○口語に高處をいり
たかひ 神代紀に劔柄をよめり日向風土記にも高日村にり劔柄村に
成後人かくちりといふも手上の持せるも一カ成集に焼太刀手預とい
えたるも一本は預と頼に他なり○万葉集に市皇子に挽きよ我大
君ハ高日ちよめぬといふ人死して天よ返るといふ詞也
たがふ 神代紀に成字又差字成よめり違と同一とて通せり錯も
よめり音さく也拳錯の時措と同一○人を訪て不在ある成といふ

およぶえり

たうさご 高砂とあり素性高砂の尾上乃さくくくよみ匡房の高砂乃尾上の搦
嗟よりり古今集は高砂の尾上の鹿とよみ一山の敷名也砂長お山といつ
は据る也といつ ○高砂の催馬樂律效の名ふといつ八雲抄抄は六條
九大臣のせ給ひて後相方おとよりまのふつり給ひるに高砂の程は
て高砂といふと船人といはけき昔高砂い出て

高砂とたがくといひ昔高砂一尾上乃一まめを恋しと
和琴の事かりい出くよくはるよやくも ○播磨一所の名とあり
一の後世乃り也後拾遺集よ

我のこころをいひくかき高砂尾上の松もまことたてりけり
その名松はたと五尋ありて嶋雄の二幹茂るより高砂社記よええり
真風の秋い今いひくす老の友ふくくふりくも也拾遺集よ買之
いひつりよせよふおとく高砂の松も我をやましくんりて

古今集の序は高砂住江の松と相おいの中よええといひ老松の名ると

地名はして對高砂ふせり明神は延喜時よ大邑貴命 高砂乃後圓融院の時
素盞鳴尊奇稻田姫をりて相殿とす天禄二年也といつ ○蛮國の名はた
らさごといひ東寧也其國都八寛文元年は国姓爺より一台湾也と
いひ思明列といひ隋人の流求は表る時到高華嶼といふと台湾は指ていふ
といひ明史よ万曆四十四年日本有取難龍山之謀其地名臺灣密通福建
とる少国姓爺母は本土松浦商人女也故有勇有義而被擄而不汚身遂潔
死以是至錦舍奏舍而不失東寧請援於本朝而許之ん也

たうさご 倭名抄は高機といふ、いり日本紀は高機とよめり今いひ天工開
物の花機也錦綾と織乃機といつ ○姓は高畑いり

たうつき 江次第は高杯万葉集は高杯とよめりまさをけよつらたうつ
さといふとよめり ○伊勢物語は海松高杯は盛る櫛成栗て其櫛
は昏りといふなり ○姓は高槻あり

たうす 新撰字鏡は稲とよみつと耕とよめりすは田成かつとよめり田
とよめり也詩話は一歳曰蕃始及草也といふ也

たがひよ 神代紀よ五字とよめり手換の義み一俗に相身たうひとて
何り送も同一靈異記よ逸もよめり更送也と注す更代交錯もよ
送通して軼も他も更也互也と注す交錯ハ俚語のたがひちがひ也

たうとす 万葉集よ宮柱太敷奉高知為^{ミラス}とて古事記よもひも多迦斯
理とて高敷とてよ同よて祝詞よ瓶上高知^{ミカケ}もみしより知ハ敷也
敷ハ繁^シ茂りよ千木高知^{チキ}も千木高敷^{チキ}も太知^{チキ}も太敷^{チキ}も

たうたま 万葉集よ神祭の矛よ竹玉と繁^シ貫^キ出^スとよめり竹の輪と玉串
おとよ^シ然^ルとて神代紀よも五百箇野^ノ篋^ノ八十玉^ノ載^ルとてん也

たうひつる 古事紀万葉集よ日の花^ノ詞^ノよ高照とちりてたうてこと
よむ^ル誤也といつる○万葉集よ高光^ノ御^ノ朝廷^ノももも
たうが^カ 中臣^ノ枝^ノ高津神の災とて雷神也といつる瑞穂^ノ枝^ノ日蝕^ノ月蝕
彗星^ノ客星^ノ霹靂^ノ等^ノの災といつる履仲^ノ紀^ノ有^ル如^ク風^ノ声^ノ呼^ル於^テ大^ノ虚^ノ云^フの^ル舒^ノ明^ノ
紀^ノ大^ノ星^ノ從^テ東^ノ流^ル西^ノ有^ル音^ノ似^ク雷^ノの^ル事^ノも附^ルとて

たうらうり 中臣^ノ枝^ノ高津鳥とて天物也といつる遷却^ノ崇^ノ神^ノ祝^ノ詞^ノ天^ノ若^ノ彦
と高津鳥の缺^ノ依^テてとて名無^ク雉^ノといつるや一^ノは^ノ仲^ノ哀^ノ天^ノ皇^ノの^ノ崩
落^ノ六^ノ神^ノの^ノ詔^ノ隨^テて^テぬ^ルの^ノ民^ノの^ノ罪^ノより^ノ起^ルなりとて其^ノ罪^ノ汝^ノ水
ぬ^ルて^テ大^ノ枝^ノを^ノせ^テ留^ルる^ル天^ノ武^ノ紀^ノも^ノ怪^ノ異^ノよ^リて^テ大^ノ枝^ノの^ノ有^ルと
ぬ^ルて^テん^ルといつる

たうみくら 日本紀よ尊位又壇^ノ宇^ノとよめり高御座^ノの^ノ義^ノ也^ノ内^ノ裡^ノ式^ノ元^ノ正^ノ朝^ノ賀^ノ
設^テ御^ノ座^ノ於^テ大^ノ極^ノ殿^ノ敷^テ高^ノ座^ノ以^テ錦^ノとて今^ノ其^ノ体^ノ相^ノとて延^ノ喜^ノ内^ノ藏^ノ寮^ノ
式^ノ内^ノ通^ノ寮^ノ式^ノ等^ノとて始^ニ御^ノ即^ノ位^ノの^ノ時^ノに^テて^テ登^ル夜^ノも^ノふ^ル紫^ノ宸^ノ殿^ノ乃^チ中
央^ノに^テて^テせ^テら^レと^テり^テ登^ルも^ノ御^ノ休^ノ息^ノ入^ル御^ノなりと^テ幸^ノも^ノ何^レり^テと^テ紙^ノに^テて
え^テり^テ其^ノ形^ノ状^ノハ^ノ鳳^ノ輦^ノと^テ同^ク様^ノの^ノ物^ノ也^ノ大^ノ殿^ノ祭^ノ祝^ノ詞^ノ天^ノ津^ノ高^ノ御^ノ座^ノと^テ日
本^ノ紀^ノ登^ル天^ノ子^ノ之^ノ位^ノ汝^ノた^テみ^ク志^ルと^テよ^メり^テ○三^ノ代^ノ実^ノ録^ノ天^ノ日^ノ嗣^ノ高^ノ座^ノ
乃^チ業^ノハ^ノ掛^ノ畏^ノ近^ノ江^ノ大^ノ津^ノ宮^ノ余^ノ御^ノ宇^ノ世^ノ之^ノ天^ノ皇^ノ乃^チ初^ニ賜^ル比^ノ定^ノ賜^ル倍^ノ留^ノ法^ノ奈^ノ利^ノと^テん^ルハ
中^ノ古^ノの^ノ法^ノ也^ノ○高^ノ御^ノ倉^ノ山^ノハ^ノ近^ノ江^ノ也^ノ

たうこの 後日本紀よ伊勢大神宮正殿一字財殿二字とて今乃東西乃宝殿

是より

たむぐり 辨色立成は尺の竹量也と云ふり裁縫尺にて今いふ物なり也○お
と量るの古法は身の長或は手指よりして量る是を長量と云ふなり八咫鏡
八握、劔八尋、殿ふどの教也今も矢は十二束三ふせふといふり民間の茅屋も繩
と云ふりして架と定むる法あり西土も亦同一同身寸の法なり○鷹の巢とか
くるは一尺二寸上は枝と云く其枝は居て餌とたははさおけまは母を咬まぬ也
よて一尺二寸は鷹秤と云ふなり定家卿鷹狩也

男山鳩やわひするたうりわけおくれやるはらう

たきぶ 倭名抄に船はより三代実録に高瀬舟と云ふり平群郡龍田川
と云ふ舟のりたせは高背の舟の形なり也と云ふり金葉集に

何粟れまをこれいふ川をわくさそれまのそす

蕭則陽の詩は無数過船音不見人聲却在禮色中と云ふり○高瀬神社及高
瀬川高瀬淀は河内國茨田郡あり信濃國安曇郡大町の西に高瀬川あり
なるは 日本紀に雲車と云ふり軍中物見車也

たうまのく

神代紀に高天原と云ふ高天原と云ふは廣く平らなる

と云ふ時して葉中と云ふり○常陸國海上は今高天原高天浦の地

名あり

たみくお

日本紀に天位又實位成訓せり

たむかさ

古事記に高胸坂と云り高は其處上あり坂は骨と云ふの坂

乃云くある也神代紀に胸上と云りたむかさといふは胸前の義あり

たうふがな

筆刀と云りたうふがなといふは元服の理髪に用る

物也神代紀の竹刀より云る事あり

△たき

龍と云ふり古にきを信りよるは万葉集に龍字成云り夜の

多又云といふはけり奔湍也と注と湍と云ふはせと云ふはあり疾瀨

也と注と流瀨川と云ふは是也されは瀑布と云ふ也李白の望廬山瀑

布詩にも飛滝直下三千尺と云ふり○助語と云ふはたてて云ふ也

まふと云ふは痛乃と云ふはつと云ふは辞也といふは痛なり痛

うれいといふなり日本紀の慨哉と云ふことより原氏よりかく
とてや多ううんと云ふはよくらふ語也○麓泉とらふは白川の
とてはれぬ一麓とみまけりたての系ふことある是也○麓の
西行の事あり伊勢流と云ふなり又吉野より河のみやこもよりの
方集りて
も流野の城へ伊勢飯高郡河俣谷の内なり元暦元年和泉守平信兼住
しと義経の兵に攻められぬ又丹波國より○麓の音ハ秋拾遺集に
大覺寺に
人あまきくちかてけるよふるも流成又くよきけりる上は音
くらし下は別也
とらけり千載集にとも此秋成入く麓の音あり拾遺集に麓の
音と傳
ひあり

たきふ 麓と云ふはたの詞也一全浙兵制は麓と譯せり今も
後湯ふ
とよふも是也よそ万葉集に落沸とておちぬとつとよあり
つとよと通
そ又たざり流成とてよありちとて通をたざりの謂也たざり
つ流の
も流れたざり速川とて白川とて川内とも同しとる○人の
性質よしも湯よりかゝる詞也一

たが 古事記に今吾足不得歩成當藝斯形と云ふ日本紀に手研は
他
る茶研藥研の類也一倭名抄に硯と云ふもよあり一説は舵と
たい
とよありきといは横音通といふ也といふなり一たがの將せ
る也○美濃國多藝郡の名と是よりわらふなり古事記にも又古事記
は出雲國之多藝志の小濱といふなり出雲の地名也
たごぐち 船口と云り御行水の所は船と云くけり其口に勤番と
る武士
とらふありとも是人の下はゆるもの也とて船は武者ふとも
毛馬副の船
口もええなり○所の名に録書あり

たごぶさ 日本紀に髪字頭髻字頂髮字ふは訓せり髪と結
結めるの義也
略してたごといふは是也たごといふはたごり反り也
△たぐ 榜とよめるは神代紀に榜幡榜繩榜衾万葉集に榜衣榜領
巾榜角
ふといふなり字音は榜似楮色白くも東國の俗もふなりよ木
これ一
といふ字のなりその本よりて此皮と割取て用とこれたご
ふの事也
一〇口語にも多く附てり詞也希ふ事あり日本紀に慨哉と
らふ

古今集にりるどめてたそ源氏にゆきたるこも多
か人とも由○髪とあぐるとりやとくをほきよめり万葉集は若中を髪友
とたぐしこもたげぬをたぐひふがに姉髪ともよめりふれ及げばら
及が也馬よける馬たぐひ舟よめる船たぐひとつるとこ通る
ふも及ぎ也皆たぐりあつるの事也○語の終よらぬ痛の字れよめて
くろれくえくはくくの教異國よ愁殺笑殺ふく殺の語とゆへらふ
かー○焼とたくとらぬ名義集は陀呵云焼くくくは梵語也とい
ふたたく火たく香あともらつり日本紀は然とよめり古事記は焼茶焼凝の語
えくろ

たぐり 神代紀は吐とよめり吐逆ともいふたぐり上るこ也疎別して咳て痰
痰吐をくくるとつとく播磨は咳とくく奥西はせくぐく○相撲の手にも
いり

たぐひ 彙属述醜類比匹儔等とよみ神代紀は耦とよみ新撰字鏡は儻と
よめり佛足石の子よたぐりよめり一見及ひ也○古今集の序は古衣通

娘の流也といふも童装掛の流の字たぐひといふ一といふも

たぐさ 田草ハ万葉集よるもたぐさ取ともいふもよめり今田のまよらふ田舎よ
田草舞といふあつ○手草とちるは古語拾遺よみよ古事記は手草結天香山之
小竹葉とらり神樂條のすふは凍のなはたふがにりてとてくくも條のなはた手
草よ取てといふあつ一楚辞は傳芭兮代舞注は芭與龍同巫所持香草也といふ
よ似たり

たぐらふ 比又敷とよめり新撰字鏡は倫とよめり手鏡の義あつ一技と同一抗もよ
めり

たぐさ 日本紀万葉集は副字とよめり古今集はむの香成風のほりよたぐてと
とよめり是也へる及ふ也たぐひと同一新撰万葉集は支てとくくも混和のそ
なもいり

たぐり 日本紀は手扶とちり手壺小壺のたぐらふ也今も土より壺出せりおは陶器の
内は指して掛するものあり

たぐさ 神代紀は袴幡千姫命まは守幡は掛るる一万葉集はたぐり

ある機の上は真摺りて楡上拷嶋とよあり
 たぐぬとよ 日本紀は拷衾新羅國と云ふより新羅は白と音かよ人の属くる也摺磨
 風土記に白衾と云ふより万葉集にもあり人を白拷と云ふよりこれの拷布の衾
 の衾は白とあるは成して也豊後風土記に此木の皮と本綿と云ふより
 ころこれの拷衾も實に紙衾ある一古事記の字はたぐふとほとやぐと
 ころころめふと云ふや俗語は四六衾の夜の物と云ふも四六の紙の敷て近世
 まても庶人の嫁娶ふもけと用うころころとやぐと通と云ふと
 かな也

たぐはぬの 古事記万葉集は白と云ふつけより拷つ布と云ふ也今蝦夷人の
 ころころと云ふ也とて粗なる布也信濃ふもあり又本集は寄布恋源仲正
 ころころと云ふは悉くはころころと云ふ布の終るゆみある人のころころ

一説は拷細之也

△たけ 長と云ふはささの糸也年のたけさる徳のたけさるも皆同とあり○又
 とよむも長と云ふ也○竹の一寸ありて長さるのさ也といふ八月と成り時

と云群芳譜は竹小春といふ○雄竹成り竹といふ常の竹也雌竹成り竹と
 ころ後まで及ばず○業平竹ハ雄竹とて節ハ雌竹のころよと名く○
 箱根竹ハ細長一品川竹ハ川竹のわー薩摩竹ハ雌竹の品兼好竹ハ竹の
 りくまとのびやある物也○三股竹ハ武藏豆五郎村にあり実竹ありよ
 ふーと云ふ又節一つく一段と云ふは竹のあり○美濃高瀬の南うら海
 と云ふ所の八幡の社内は豊竹あり圍四寸と云ふ寒竹の大なるわー八月
 筍と云ふは當戸のまんと云ふは竹と云ふ軸一節一丈餘あり今洛東の禪林
 寺はありこの南廣の貧富竹と云ふ○冬竹ハ淡竹と云ふ竹ハ苦竹土用竹
 ハ鳳尾竹鳳凰竹とも云ふ筍生くる三伏より南京竹ハ義竹と云ふ
 竹ハ櫻竹金竹ハ對青竹嶋竹ハ黄金間碧玉竹淡竹と呼ハ秋蘆竹玳瑁竹
 斑竹箭竹の稱ハ和漢同ハ蕩竹如蘆葦といふ者と和漢同ハ布袋竹ハ佛面
 竹觀音竹和漢同ハ四方竹ハ方竹也乳児竹ハ山白竹根條ハ千里竹かま
 ろ竹ハ皮白の糸篋竹也箭竹あり糸と云ふは雪竹と類也夜叉竹あり北地

出二節ゆくは四方は枝より一節の竹は吉野竹林院にあり孟宗竹は近年渡来す対
 生竹ハ美濃は一節は西方は枝より一節の竹ハ天親竹也紫竹と竿あり忌
 ハ湘浦の故事より一節は筑紫にあり○正月門松は流竹ハ忌竹の之を
 る一安南國より正月家へ葉つきの竹と曰ふと標流記より○豊
 後詞は竹の末とくくさいといふ○蝦夷の竹は矢竹のこま信濃
 より竹生せり近年はつらといふ○日本紀倭名抄は菌とよむは味の猛れ
 なる一一新撰字鏡は英武みくけといふみくけの葉也今佐渡は困
 成みくけといふ木菌土菌石菌の別ありくもたけつらハ菌櫛の古今集の
 辞よりくも秋よりくも例ありといふと支木集は松はけりといふ○
 西土はくといふけと石耳まるとけと松耳とくといふとけ方よてハ草字
 派用まるとり徒然草よりくも鹿茸のくもよよまの茸といふといふ
 といふ○元と毒あり木は生るとる耳ハ皆身上一○齋宮式忌詞は実
 称菌とくせは武くさびといふといふハ謬也儀式帳は多氣といふ○
 神代紀は峯といふ高き峯よて万葉集は高きと多氣といふ

たといふてよみなるつらといふのはよるの幸ありといふ伊勢神宮の過は
 朝熊がむけ武畧といふ常よりけと称しはく唱ふ契沖といふ亨叔と引
 る嶽と竹と武同はやまといふ事はいつ○日本紀の秋はたけといふ
 せいといふ奉の葉也といふ又たけの下のよといふ○顯照説は田舎人の
 云は物といふといふたけといふといふ○季の腹痛といふといふ
 ハ生字といふ○式伊勢多氣郡竹神社もト部兼承は竹田は竹
 ハ是也齋宮式は竹上社とあるも上の田の誤あり一今竹川村の産神とす
 たけ
 神代紀は悍といふ猛字壯字健字も同一たけといふといふ
 ○信州小縣郡は武石村はつら武石はつら武石はつら四方の小石自然銅乃矣
 種あり又子檀嶺神社式より貞觀三年は駒弓神といふは是也○千葉常胤
 の子胤盛と武石三郎と称す
 たけ
 日本紀は梟師と訓せりハ梟師熊襲梟師の義也又猛といふ古事記は建字
 と訓せり武健の義あり○新撰字鏡は誇といふ今の俗語も此とあり
 たけ
 神代紀は躡語とぬみたけといふのみ万葉集は牙喫建怒といふたけは祝詞

式は荒び健びとせせり怒声を出して武くさけぶる也一〇たけび塚ハ
伊勢鈴鹿郡長世郷にあり日本武尊の陵と云ひはつる哉とて建部の記
みすゝと云うされと高官村にありいよと云う家と稱する者も日本紀に所
謂能褒野陵ふる一其陵の西は皇子田と稱するなり此はたけびとて御
所垣内と云ふあり〇和名按伊勢國安濃郡は建部の名あり神鳳按は安
西郡建部御尉と云ふ也

たけふハ 闌字と云ふなりたけハ長也日のたけてふといつる万葉集に最
もたけよつと云ふもふと闌と云ふなりたけと通と猶の義也廣韻に
晩也とみたり日本紀に人闌と云ふもふとぬと云ふなり廣韻に希也と
云ふなり酒闌と云ふなり飲酒半罷也と云ふ古事記に酢と云ふも同
〇紫ハ竹繩也今火繩と用る物これなり
たけのそれ 竹園の義竹のそれと云ふもふと云ふ生の義也親王と云ふなり
梁孝王の竹園乃故事也新千載集に
お近と竹のそれのそれの風はさる枝はさるつと云ふ

たけひのくに 中臣按はも高日國の義也旧高見國と云ふも同都と云ふ
てらふ也

たけのみやこ 神宮雜例集に多氣都と云ふも伊勢國多氣郡齋宮の所在所と
云ふなり提中納言のそれと云ふなり後成々のそれと云ふなり一説は代々
の天子御即位乃附大嘗會に天子のゆけは行ありせてと云う勅使持
系一内文の心の御柱は崇めと云ふなり竹の節と云ふなり俗説に
く據あり

△たご 田子と云ふなりたごのそれと云ふなり源氏物語のそれ
袖ぬはと云ふなりたごのそれと云ふなり田子のそれと云ふなり
桂海蛮志に民が強壯可教勳者謂之田子田子と云ふなり〇潮桶は桶成り
り田子の義也桶桶也に云ふなり伊勢に辰桶と云ふなり水桶乃
それと云ふなり〇田子の浦ハ駿河也續日本紀に蘆原郡多胡浦獲黃
金獻之と云ふなり

早苗と云ふの浦人おはやりやと云ふぬ袖ぬと云ふなり

△たそ 足字とよめり他よりたそさすせうとてたそと足之也と名ゆ
我よりつららるるをたそとてりつららるる○足恭の時ハ言す○美濃の山
中ニ繩試編て木葉のこも用るる物とてつらため簀の葉のこも

たそ 式文ニ禪とよめり手次の名古事記ニてり日本紀ニ手繼と出せり中
山傳信録ニ手巾試譯せり敷の文ニ三重禪とてり又龍膽禪とあり○祝詞
ニ手繼桂伴男とてり膳丈等試つた也業とてり人の權かゝるたそ○万葉集
みくろこのるたそとてり源氏物語ニ姫君のたそ引ゆ清女納言とて
ぬねぐたそとてりあけくるたそとてりたそとてり新撰字鏡ニ綴とすたと訓せる
是也權も同論語ニ極負其子而至矣とてり

たそ 扶取輔佐の字とよめり是も手次の名古事一たそとてりたそり自他の
詞の矣也とよめりたそとてり賛とよめり佐也と注せり靈異記翼もたそ又取介と
よめり拂たそ時の御と同一音ひつ

△たそ 誰字とよめりたそその畧也侍中辭要ニ名詞事其詞云たそ

たそれ

黄昏とてり誰彼とてりたそれとてりたそれとてりたそれとてりたそれとてり
君とてりたそれとてりたそれとてりたそれとてりたそれとてりたそれとてり
白氏文集ニ紫藤花下漸黄昏の句よりたそれ○松本集ニたそれとてりたそれとてり

△たそ

唯惟直獨除第但祇帝翊特止徒直徑只かゝりたそれとてり大論ニ多他泰言知とてり
唯ハ專辭と注と獨ハ唯也各の注とてり第ハ但也但ハ單辭と注とてり又師古注ニ徒也
空也とてり西後世語録の文及俗語ニ皆但と用り帝と翊とハ同一特も但也と注
と徒も同一直も但也と注と只ハ專辭と注せり俗語の只今ハ即今の義也又
漢書ニ直と用るる多し皆但と注す第通作弟或作地兩言傳の注ニ師古云地
亦但也語聲之急耳とてり戦國策の注ニ適會同とてり又春秋ニ唯を
用お各經ニ唯を用お詩經ニ維と用り梵書ニ唯但字不借餘縁ともてり又
除是除非とよめり宋乃俗語也俚語の是非ともてり又予とてりたそれとてり
る詞也とてり人あかんとあかると同一たそれとてりたそれとてりたそれとてり

とらり人の名は忠とくとも直とあやとよむも理よくあふり
○攝津河邊郡
多田院村は五社の祠あり相傳滿仲頼光頼信頼義義家とあると滿仲攝津守
もつりより多田源氏の林あり源孝道ハ滿仲の季子文才あり巫陽有月猿三
嶺无雲雁一行世以て絶唱とす○たが有明の月と残るの秋ハ千載集ハ曉聞
郭公といつるむ誠読侍りりかとも後拾遺集よ

有明の月よはらまや時鳥と一歩の行方とふ

金葉集よ

郭公あうくさぬるまよりのはるさ空まかあけらる

曼等の秋の心しるしむと秘と此秋ハ殊の外よそられて身由といふ古人と郭
公の秋の才ととらつとよやく称せり○實定公ハ文治五年九大臣建久二年出家
称後徳大寺○名よ一條左大臣師冬公あり幹とよむハ寧幹の也也齊とよむ東
鑑ハ田口齊名改紀姓と見えり

たがー 正とよみり○名よ忠格齊公あはばよめる也○俗よ但をたがー

よむ徒也のそよてたがーハ女まけりたがーハ抑字と相似り

たがよ 徒とよみりりくはくくよむ也又直とよみり又万葉集ハ黙然と讀

り伊勢物語ハいそくとたがふ中ぬてとみり神代紀ハ不直黙歸とみり
とら但もたがふとよむとみり又たがふの略あり伊勢物語の是とた
が奉らへとらふ一乃教也

たがす 紀とよみり令正乃美也雄略紀の予はたがとらも○今の氏姓

ハ河合派よめるハ下賀茂のたがその森と神名式の鴨川合坐と云せる也といふ
みりゆる也式ハ鴨川合坐小社神社とも高野川と云るや賀茂川よ合よ
て川合といつり小社ハ三代實録ハ小祖よ作る年中行事秘抄ハ御祖多須玉
依媛命宅ハたがすと訓とす一予ハ九の森紀の文あくとよみり古事記ハ日子坐
玉娶近淡海之御上祝以伊都玖天御影神之女息長水依比賣生子丹波比古多
須美知能宇斯王とみりたがとの名是とらあはるる姓氏録ハ鴨縣主彦坐命
之後也とら又賀茂縣主神魂命孫武津之身命之後也とら山城風土記ハ賀茂
建角身命娶丹波國神伊可古夜女とらとら○名よ繩とたがとらよむも紀
のそ也

たぢり 新撰字鏡倭名致之徑字とよめり歩道也く注と万葉集の直道と云直字とよめり予と云のたぢりふくもよめる也今すくちといつら

たぢふ 崇とよめり神の禍とらふ也徐曰禍者人之所召神因而附之と云也
たぢらるるの義たつ腹くひのこみぬつちら及た也又痛とよめり

たぢむ 疊字浅とよめり手矯るをぬつち○拈衣と云るもたぢむとよめり靈異記の膝とよめり膝收其衣と云也

たぢく 神代紀の搦字浅訓せり俗は物と撃とらふも通せり敲と讀りかふ及くふといたくふの義也靈異記の叩とよめり○古事記の予と云そた

とたぢくともいふ發語佛足石の予いもそつる人とも足人のそ也
たま 日本紀の策とよめり万葉集といふまゝ祢とたまかともよめり

大明録の言語不及處策心謂之機と云く○從之万葉集の末未の誤多とらありと云

たら 日本紀の踏鞠とよめり文選の鑑とよめり新撰字鏡の館とよめり埃

囊扱は大會の火桶元三の所藥温むるたらふく世の培く乃物ありと云後冷泉院の御時焼くといふ仲實

たぢらたて吹の去令と云くお波垂と云けせぬ人やいふ所

○あぢら氏の百濟聖明王之後也といふ周防佐婆郡多良波初て来り

とらに校と云く山口とも大内とも林と云く海東諸國記に世居別大内縣山口と云く筑前と云たらは渡あり菊池武敏と尊氏と戦ひて處たり

たぢと 倭名扱之絡架浅とよめり天工開物之絡駕と云く由延喜式に櫛字を用

わいはたけりかぢぬつし令集解に線柱旧事玄義に綿柱と云くり木波三股はて麻と巻物也といふ姓氏録に任那國至金多利金牟居と欽明天皇に獻

せりと云く由大神宮式に金銅多利二基高各一尺一寸六分土居徑三寸六分と云くこれに三寸六分四方の物波下居と云くこれは一尺一寸六分ある柱波多と云くもの也
一方葉集と云みとのたぢと云くかけとよめり糸と云る臺と云く六帖に
但馬の糸のよれとも金ぬきと云く竹のたぢと云くはけと云く
此等崇禍と云てよめり○かふ物またで令あり○たぢと牧東鑑と云く

信濃國安曇郡大田、井小田、井とら村らり村の上方に牧あるを方り○万
葉集よりしと云かるるなりしと云ふことあり也たらの約きた也

たつ糸 日本紀は稱拜とたつ糸と云ふは祝詞式は御名成林とて云ふてやむる也

又秘成たつ糸と云ふは譬と云ふ事なり○信字と後も同義なり

たうふ 古事記にも戦ひと流るたにけり也とあり也よて合戦も撃戦

ともいらす

たしとて 古事記は訓云多と云ふもたしとあり也いなりてと云ふて成初

とのつたしとてとらふ崇め詞ありて古事記の例格なりて是とて辨也

たうとく 凡人と云ふは日本紀にも又非常成たびと云ふは凡人と云ふは名

伊勢物語は二葉の右と云ふ人ありてありり付とありて直人と云ふ詩經は

本ける加へ源氏と云ふはくはた人の形と云ふは凡と云ふなり○凡人清華

と云ふは稱也よて後然るにたうと云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは

やとらり平家物語にも云ふ倉文と源茂仁と云ふ人にも云ふは凡と云ふは親

王皇孫ふと小對してと云ふ人といふ清華と云ふは凡と云ふは親

たむむ 神代紀は臂と云ふは手、向の義也といふ又腕と云ふは倭名也

ともん也新撰字鏡は肝も云ふなり

たふつぐ 日本紀は万葉集にもたふつぐと云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは

よとらる青山の幾と云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは

凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは

たふとれ 草紙の教は多と云ふは詞也禮記は委字と云ふは万葉集は置有と

云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは

はやくとたふつぐと云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは

たふとく 古今集は序にも凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは

喩ともとら凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは凡と云ふは

△たち 日本紀倭名也大刀と云ふは神代紀は横刀万葉集は劔と云ふは

祝詞式は打斷物止大刀と云ふは截斷の義なり野劔劔劔時繪螺鈿通螺鈿

尻鞘黒塗木地と云ふは名あり平鞘、大刀は高時繪也白大刀は菖蒲草の帯

取のり持太刀、向内、乃物也衣冠直衣の時おせしる六位以下は黒漆と用

遠也と注と手ぐりツレ也佛家ノ頓漸の語あり探玄記ノ迂捷とありツレ徒ノ通して斗ツレ作ツレ頃也と注と○たちまら草ハ牛崩也

たちかき 日本紀ノ擊刀とあり今ノ太刀也○たちとあり凡ハ劔術あり一常別鹿嶋の住飯篠山城守家直より世ニ弘ツレ其後下總香取塚原木傳是と新當流ツレ少愛洲移香ツレを陰流ツレとツレ上泉伊勢守ツレ新陰流ツレとツレ武備志教養ツレ影流とありて猿飛猿回山陰ツレとツレなり

たちかき 日本紀ノ税と訓ツレ田力ツレのツレ也或説ツレ大税と倉ツレ位ツレ至ツレて春耕乃時ツレ也

てかして耕田の力と云ふ也ツレ田力ツレとツレ也税又脱ツレ同ツレ一ツレの音○大神宮式ツレ小税大税斤税あり以五把為束と大税ツレ一ツレ把為束と小税ツレ十ツレ一ツレ也式ツレ儀式帳ツレ細税大半斤大斤ツレ他ツレ又懸税あり倭姫世記ツレ先穂ツレと枝穂ツレ二ツレ半分大税ツレ新ツレ枝穂ツレハ細税ツレと名ツレ亦大新ツレと号ツレとツレ○租ツレ日本紀ツレ訓ツレ同ツレ寸令義解ツレ謂ツレ田賦ツレ為租也ツレと

たちかき 橘ツレと訓ツレ今禁庭南殿乃橘ツレハ橘ツレとて橘ツレのツレ木ツレとツレ今ツレも現在ツレなり衆樹ハ遍照僧正の孫也石清水の坂ツレとて祠前の橘ツレとツレ枯ツレとツレするツレ也

んく

千早子ツレ神のみまのツレとツレなり木ツレとツレ昔ツレハツレいツレなりツレ哉

其後橘ツレと再ツレハ衆之衆樹ツレと母ツレハ遷ツレマツレてツレ参議ツレマツレてツレありツレ大鏡ツレハツレ又ツレ少

春盤ツレハ用ツレハ也田道間守ツレハ絶域ツレトツレ採ツレ来ツレりツレ日本紀ツレハツレとツレなり

トツレ田道間ツレトツレなり其裔橘守ツレトツレなり此種初ツレて本邦ツレトツレありツレ也ツレ名

成ツレ種ツレトツレなりヤツレ橘ツレトツレなり最下品也此種ハ綿橘ツレトツレなり○花橘

トツレありハ花ツレ賞ツレトツレなり也後世盧橘ツレトツレ花橘ツレトツレす後中ツレ昏王盧橘ツレの題ツレトツレ校

繫ツレ金鈴ツレ春雨ツレ後ツレトツレ他ツレトツレなり盧橘ツレハ金橘ツレ也今金柑ツレの名ツレトツレなり上林賦ツレハ盧橘

トツレ枇杷ツレトツレ共ツレトツレあり李伯ツレ詩ツレトツレなり盧橘ツレ為ツレ秦樹ツレ枇杷ツレ出ツレ漢宮ツレトツレ作ツレハツレ枇杷ツレトツレす

る説ツレハ非也潜確類書ツレトツレなり盧橘ツレトツレ復ツレ蜜相ツレトツレてツレ復ツレトツレ至ツレりツレてツレ熟ツレトツレなり者也

いり頭仲の炊ツレト

我宿ツレのツレ橘ツレの色ツレトツレハ金ツレのツレ冷ツレトツレなりトツレなり

○昔ツレ瓜ツレ志ツレのツレふツレトツレありハ田道間守ツレハ帰朝ツレヤツレ時ツレトツレ命ツレセツレトツレなり天皇ツレ己ツレトツレ山明ツレ給ツレてツレ自ツレトツレトツレ哀ツレトツレトツレトツレ死ツレセツレトツレなり今集ツレのツレむツレトツレのツレ神

のうごころといふ所の半ありといふり○袖の香とよめる南唐近事と鍾
傳鎮江西以曆日包一橋致袖中有客覆射曰太歲當頭立諸神莫敢當其中有
一物常帶洞庭香と云ふり○堀川百首よ

別近とを橋のうけり香はけり袖と人そあやまふ

是ハ陸績の故事とてよめり○うごころといふ所の半ありといふり右近の橋の禁

中橋樹彫枯経日忽生花葉楚可愛と日本後紀よん康保三年仰左右近府被

移禁秘抄よんり○春盤は用ハ万葉集よ

橋ハ実さる花さ其葉さる枝よまあけと云ふてさるのさ

とみさるさるさる續日本紀は橋者菓子之長上人所好○橋寺ハ高市郡立玉村

よめり○橋諸兄公の墓ハ和泉國泉南郡よあは藤原植通公此よめり

橋のよとめりさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

○草橋ありむとて名く○藏玉集よ時鳥は橋鳥といふり○立玉城ハ筑

前よあり○橋の小嶋崎山城宇治也古今集よ

今もさるもさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

△たつ 建立豎起よとめり日本紀は樹をよめる本立のやとて書ふも樹徳と

よめり發字とよめり名のよ風のとらふも云のよも同い

ふりや後紀ハ雲刺と見ふり万葉集よ門立て戸も閉ふ成とよめりも同

いなり初るいりさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

口詰は月日のなつとりの類也又たふひくたふさるさるさるさるさるさる

といふ皆同い○字彙よ植立也とみ又植蠶器用以架蠶薄者とて也○奉

る成立とのさるさるさる大神宮儀式帳ハ伊須乃宮仁御氣立止ハ御食奉る

てよまみり万葉集よ山神乃奉御調等又常官等高之奉而とみり○足の

たぬハ白氏文集よ九足不支とみり○裁断ともよめり徒然草よ妙観ウカハ

さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

音の縁日成十八日とてと妙観八月十八日ハ化も成とてありといふさる

五祖山師戒禪師三十日の念佛圖ハ十八日観音成記セと倭の事のもよ成と又世ハ東

観音の林ありと東ハ十八日成約ある也といふり○閉る成ハいりさるさる

万葉集にもさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

乃淵入りしは鮎も集りて木根とて入りしと云○松平越中守殿奥州
 左城の時家臣某地に住し龍と射て家へ歸りぬ其夜龍来て其家とま
 龍倒るるれもかの瘻は疲りしにやとてとて驚きぬとて眼とくり出
 隻眼を主君に奉り隻眼と家へ藏めぬ其後伊勢末名は移封乃時右の家
 臣所藏の眼を揚柳寺乃分天社に奉納とてし其眼年と累とて威光射
 入ると又土佐の海より春夏の間に龍昇る其辺の村に破損多きをりて太鼓銅
 羅法螺と集めぬ民をと送る送る其効ありと云○荀子は騰蛇無足而飛
 り者ハ今も天上に人として竹木とせると云に皆ういさやうある蛇の類とて雲
 氣よりて来ると云ふ人て其形大に變せり是と指す龍○龍の上天は火焰
 のたけに沈むる者多し埤雅に龍火得濕則燄得水則燄と信ふあり○小
 石中より龍の出る物語古今多し佐石供とて或より龍ぶとてあり○
 雙角五九龍ハ天子服御之彩紋也臣下ハ三九龍也○五龍祭日本紀畧扶耒
 略紀等ふんり陰陽道の祭也○飛龍あり候家の秘儀とてあり○龍
 の奥ハ上野國山上郷也足利又太郎忠綱も憑り所也○室生龍穴神社ハ宇陀郡

たづ

室生村にあり龍穴ハ吳都賦にも湖東新平縣有龍穴常以請雨也
 倭名鉞は鷄と云あり田鶴也といり劉長卿詩に田鶴稻花中とて
 みくろたづとてはつとて多く集り鳴るとあり○たづの大屋敷とてあり
 名たづとてみ也と徒然草にもあり

たづぬ

尋と云あり又温をよむ韻會ふ習也とても原字とてよむ日本紀にも
 えろり事乃起りと尋める也論語に繹とて靈異記に推もよあり○播磨出
 雲土佐とてあるとて万葉集に尋字とてあるとてあり

たづ

万葉集に方便を訓つとて頭と用ぬ又田鶴すふとて云は濁る辞を
 手着乃氣候とのを也といり跡状とてと同一と訓とて又たづとて
 ええとて○倭名抄に鑄とてあり廣又斧也とてハ仙人の用る物也山たづ乃
 條に併考へし古事よ

年終るる杉原の山のまひしとてたづとの音乃かのまひしとて
 伐木丁々山更幽のま也又古今集よ
 春を迎乃たづとてまひし山中ふれぬかくもよとてあり

けずあまをのりてよめるか一儀式帳に立削鉞とせせらるる鑑の事とや
さうかつと清てゝむ一

たづな 手綱の糸韉也といふ全浙兵制の韉繩とて中山傳信錄の勅引索と
えり公卿ハ蘇芳の綾殿上人の棟の綾六位ハ紺の綾かゝるよ一物貝扱よんえ
とり○体源扱よハ幡殿の着鎧の次第とせせ一ハ第一ヨ手綱とてんゝハ
下帯の事也といふ大諸礼ともんゝ後またんふといふ

たつく 天武紀ハ祠風神千龍田立野とて祝詞ヨ我御名者天乃御柱乃命
國乃御柱乃命とて式ヨ大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社二座と
みゝり是今も立野といふ所の社あり今龍田といふは法隆寺乃邊あり
て神幸の地ありと云龍田村とす又式ヨ右ヨ夢ひて龍田比古龍田比女神社二
座とみゝるも俱ヨ立野村とあり法隆寺より二十町斗也万葉集ヨ

我少く七日の過一龍田彦ゆめを成風りちゝとれ
ふかり一の風吹くくち成てきよむ社ヨ風祭せふ
龍田彦ハ級長津彦命龍田姫ハ級長戸邊命あり一式ヨ別ヨ奉りより一荒魂

和魂るゝ祝詞ヨ比古神比賣神二神と奉り後の世乃や一龍田姫とてあ
るも是也○龍田越のり神武紀よりみて今らうゝり嶺也

たのみづ 万葉集扱よ水ハ水ハ水とて水也とてんゝと波ありとて
たづな 携字扱よあり手と副の義あり一たのみづといふハ靈異記万葉集ヨ
みゝりあり及ひ也○新撰字鏡ヨ携と見ひさめてゆくといふあり

たりのそく 建除満平定竊破危成納閑の十二字と十二直といふ曆の中段ハ入と
て是ハ五行家の内ヨ建除家とてり史記ヨ石詩ヨ建除体あり鮑明遠より
起るといふ我邦ヨも治文雄ヨ詩經國集ヨ出り

たつの成乃みち 禁中の龍尾道也盛衰記ヨ成のちといふともこれとや
△たて 縦ハまの糸也經緯の經とよむも同一○看と訓とらハ隔の義也神代ヨ
ア見えく鹵簿乃取也よて一名楯也えの木とての本もハ試用とてテ鉄指白
楯皮楯ハ日本紀ヨハ楯楯ハ和名鉄とみゝり今持者楯者乃名目ありてとてハ或器
とテ太平記ヨハ一とたてといふ也とてり○俗語の人ヨたてつく何とてとて
とたるといふと看より出り○海の漁とてたてとては隔の義ありテ諸と看く

すも也嶺表録に鮭鮭くらし也也たてがーたてはくふくもらる伊勢志摩よ日
と期して魚取とらふ○たては時と紀別熊野あり増基法師

うの浪よみちくを御のたつみみ看る時とらふよを育けふ

姓中といつ義仲の將權親忠あり信農人根井行親の子也

たて

何とてといふ辞は何とてといふ同○どて風どてとらふくらし男たて

ふくらしより出る詞成一治容と譯す男とらるるといふは之の義を承一説り

因東まで小六ふる者り伊達氏某の僕也遊伎放曠の徒より時人は伊達小六とい

ひしより始る或説は寛永上洛は仙臺侯の従士衣類殊は美麗ふるしは京童の彼

ハ伊達人と云より起る○俗語は賢者ひよりたてをーといふ○伊達成よむ

ハ式は又少射権と同義ふる一東鑑は伊達續る也

たては

日本紀は所植とよめり古今集はとふたてりうふ梅のむと折るとらひ又

成よむーーとてつてゆくとらふ男山かーたててーとらひと

といふも也○むとたてるとらふも同義ふる一むとらけとらふも生るの義ふるは生

殖とあらたてるとらふもとてつて後撰集よ

折つてはたさよけつるたてふかるとせ乃仏よむたてまひか

ふれいたてむといふ新千載集よひえの山乃念佛のまむとてつて今とらふと音

に呼の語かー植ハ杖杖とらると同ーちの音也ううの時ハ志うくの音也○茶とた

てるとらふも發るを調とらふも大規茶論ハ拂撃無が茶不發とてみとら○轆

とたてるとらふも西王に望といふ

たてく

帯刀とよめり日本紀は大刀佩とみとらう古今集はたてとらとて今

も上總国よいたちとらとらとら○右カといくとらふ一今つてとらとら

式正ハあくと○禁闕ハ滝口と稱一仙院ハ北面と稱一東文ハ帯刀と稱と

皆近衛府より分ち補せり

たてまひる

奉とよめりて帰順の義也とらふは立君ふとらふとら一匡謬正俗

よ奉者皆謂恭而持之とて又えより一説は古事記は立奉二字とよめり獻る代と

とらふといふ奉はまひるくとらふもよめり也

△たて

伊勢國東名郡多度神社相傳て國常立尊とみとらふとら一攝社よ一目

とらふとらふとらふの變化神也と國常立尊ハ國底立尊とて一ヤセハ後田彦神

とすゝとすゝ也伊勢國中大社二所よりて多度と阿射加と也共ニ猿田彦神
汝祭とすゝ一宮の神も亦同

たふふ 譬喩とよりたふふとふふとふふとふふと何ぞおたふふて云ふの
とより理語とよりふふとふふとふふとふふとふふとふふとふふとふふと

たふふ 行道のかやつふふとふふとふふとふふとふふとふふとふふとふふと
名伊勢物語と尋字とより手取の義とより拾葉集と八端字汝訓せり

説文と足不正也注せり踞と訓とよりや詩注と行不進也と足ゆ或踞
字汝とめし字各ニ跟也との注して其義又えと

たふふ 假令とより或ハ音とより假使も纂要と逆料之辞とより又假饒と
直饒も設使と饒令も縦饒も同 譬使も同語也即字就字設字縦字と

より一「字と二字ハ緩急の異也任とよむハ俗語也神代紀も若使もより
も一と相違ふ辞とより共ニ設くる辞ふれもたふふハ未素とらふと也とい

たふふ 古今集の序とより奥の体也とより即万葉集の譬喩也

△たふ

日本紀古事記と板擧とより倭名抄と柵閣とよりみ姓氏録と柵をよ

み新撰字鏡と柵又度とより常と柵とよむ ○類聚雜要とつら柵みゆ ○倭名

抄と蒲公英汝訓せり田菜の義あり ○俗と店とより坐賣物之舎也と

いハ柵と義同 今らふとせ也 ○万葉集と身と多素不知とも事ハ柵知ふ

とともたふふと知得る事也といふ

たふふ 万葉集とより手刺の義也たふふの琴たふふの駒たふふの琴ふとより

たふふ 起靡くの義神代紀と薄靡と訓 万葉集と霏霞とも輕引と

とより變隼とも訓とより祝詞と霏とより皆雲の柵の如く横と引とより

○たふふと雲れ絶間とより詠の新古今集と崇徳院と百首の秋奉りより射と又

ゆ秋ゆとより引とより心つとより清輔朝臣

ひとすゝといふと果と村雲れ晴方と月ハ照すとより

此心全く同一とよりとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせと

修理太夫顯季卿也

たふふ 掌前の義鷹の左の羽とらふ也又たふふとせとせとせとせとせとせとせと

今たよとよはハ武用のたよとよをほりてとらう一説は文官ハ右武官ハ左の古實也とていふ○後西園寺入道相國の鷹百首よ

たふさとれ角の柱とかりつてやれさのまよ鳥のうらう

延喜の御門の御時鳳輦の九の柱たりとて御さの肉すくき紙すまを

たふさとれめ 倭名秋織女と訓サリ万葉集も同一棚機姫神とて神衣と

織女星とも同一く名くるよ一つハ助語あり織女の年よ一度牽牛よ嫁とて

事ハ齊諧記よ出づりたふさとよまてふまぬハ詠事ハ神代紀のすまかとな

院右京大夫 ○伊勢家集よたふさとけりるるあといふ建礼門

さうやねさうの星の物かりたふさの氷よけりまらハ

○七夕と義訓さハ後世の俗也理ふハ百葉集よはなぬれをさうらう○宋時節序皆

有休暇惟七夕有司皆入局不准假と委巷叢談よる也○七夕の秋よ系紙よむハ月令廣義よ是夕人家婦女結綵縷穿七孔針とみたり初ハ糸ハ白居易詩よ億得女年長乞巧竹竿頭上頭糸多とてたりまらけの糸とらう○庭の琴と七夕の琴也衣とむハ竹林七賢傳よ舊俗七月七日法當曬衣とみ七夕の雨次洒淚雨とらう歳時記よみたり原頌秋よ

織女いささかさうさうはなさういりまらハ心紙

是ハ夏文類聚よ京師七月七夕婦女望月以小蜘蛛在谷子内次日看之若網圓正謂得巧歳時記よ此条時陳瓜菓於庭中乞巧時有蟾子瓜上綱以為得とてたり

○信州松本の七夕の風俗よ繩流りて家と家との軒よりけ路と横さうと張木の人形よ紙衣流りてせいくつとふく彼繩よけりまらとらう○御湯殿

の記よ七月七日七色ぬらむけり御秋御鞠御基御花御貝おらハ御湯

弓御香ありとてたり御硯七面御筆七對楯葉七枚楯皮七條流飾アて其楯葉よ御歌流御深筆あり也内々行事よ楯の葉七枚とて月一人こいもの子と入さうきんさうとて御湯殿の屋根よとてとてたり倭成卿

天の河とて舟の棹の葉を發秋とて舟の葉の玉つち

○星夕の御硯水江列山邊邑星の井れ水以用う七月初旬は文殿の官人下向採束とらふ○牛女の妾説ハ五雜俎ニ辨せり貫之家集ニ

いさくうとて是れとてぬたおととて字よふと名のたつとぬらん

たふさのみよ 祝詞ニ手長御世とてし手長の天御世又手長の御壽とも

又白手ハ發語也といふ

たふさハ板也 万葉集ニ棚无小舟とて白舟ハ船也と體也と棚ありとらふは

也といふも板ハ板といふ棚といふハ童蒙抄ニ棚といふといふのふらびとてちとる板

といふ船也至るゆと船ハ棚といふといふハ和名抄ニ柁成ふといふとて

ゆつと伊勢物語ニ

河にづくとて舟といふとていふといふといふといふといふといふ

といふ古今集ニ

河江とて舟といふとて舟といふといふといふといふといふ

波にやしてはる也

△たよ 谷谿漢とよあり岳の美山のふらりとらふ也といふと韻通といふて山

城國乙訓郡の神谷と神名帳ニ神足とて一伊勢國度會郡の井谷淺

類聚本源ニは井足とみくといふ○蟪とたよといふ背の上とて谷

と似る也と石集ニたよといふ蟪ハ物ノ誤なり一牛蝨也○商布と

訓とて倭名抄ニたよといふ也といふ布也手作布といふとていふ

文德實錄ニ交易布といふも是なり一○菘國の名といふも在泥とて

是古の三佛齊也といふ又りて暹羅の内にて今を別國とあるは國女

王也といふ慶長七年より入聘と

だふ 秋の詞といふ万葉集ニ尚字成りけ在在満云とていふ時ハ其上とて

いふも成りていふ時ハすといふも成りていふ物ニつといふといふ

才よふくといふは也治といふ物ノ誤なりとて時よふくといふといふ

一の上は従ひりてたよといふたよの上の詞をたよといふて強といふといふ

辞あり拾遺集ニ

衣たよ中にありといふとかりに河とぬ板成てははるのかか

このたよとまよは一そたなまよ又新古今集よ

うたよとつれたよとまよはれりてうたよはれりてつれたよとつれり

これ一まよは二不ありて身よたれ又よまよとありてうたよとつれたよとまよは

ゆよ一かしてまよ又新古今集よ

ふやしらぬおのらな乃れまよふよこれ本あるの月いさび

この深月月の影も惜まよふよとらまよはれりてとらまよとまよと合め

まよことらひくまよのまよまよはれりてまよまよとまよと合め

又多くの嗟嘆のまよの辞なり古今集よ今よりうたよたよまよとまよ

めり俗語よてうたよまよまよのまよといつり○たよの詞とまよとまよ

四季の予とまよの予とまよ新古今集六百番予合ホよまよまよ○駄荷の

音よといつり吳音まよ

たよと 暇墓とつれ也ひまよるつれり蟾蜍と暇墓と通いつり漢籍よ

と多し万葉集よ多し其久能佐和多流伎波美又谷潜乃袂渡極し祝

詞式小谷蟻能袂渡極又谷暇蟻ふとまよまよまよまよ一歩の一才

はとたねと物の使も極の譬ともる也○古事記よ多し其久自言且字音と取

まよの例ふし具字の誤り此物の異異なる漢文よとまよ

△たねまよ 舊事紀よ手貫とまよ今も臂鞆といつりたねまよ也倭名鏡り

たまねとまよ言画よまよ今も手とらまよのまよまよまよまよまよ

まよ○狸よまよ此皮手貫よまよまよまよまよまよまよまよ

脅ハ逸物よまよ狸の油をまよまよのまよまよまよまよまよまよ

○老まよまよ愛妓し人と食又化してまよまよ又まよまよまよまよ

の家中ハ市中の躍まりのまよまよ○明和年中ハ見女の中ハ文よまよ

家よまよ酒食派よ風流をまよまよ帰まよけ狸の化よ者途中ハ死まよ

衣服編笠のまよのまよまよまよまよまよ○狸の腹つ

つまよまよげまよ其音鼓のまよ拾玉集よ

人まよまよ鐘とまよまよ古寺ハ狸のまよ鼓まよまよ

○伴眠と俗よまよまよまよまよまよ○狸はまよまよ

律ハ於塚墓廬孤格とまよまよ○西土の昏まよ往まよ人家ハ狸は畜まよ猫のまよ

馴志めて氣と捕ま成りて本草に猫狸虎狸風狸九節狸玉面狸ふとのふあ
りまゝに狸猫を狸の一名とせり安永乙未の冬伊勢鈴鹿郡高宮の辺より
異獸汝殺と旅人視て曰是風狸也と水うとありとらふ○暇夷もむく阿蘭陀に
たゞとらふ○庭訓に狸澤渡とらふ

△たの 種をよあり田根のふあり

たの 攝別住吉郡よりの社あり神名式より多米神社是也か
神代紀に為飯とらひかしてとらゆること也種と漬とらひつり後頼子よ

秋かり一室のか一絲とかりひ出てまそ田ふかは種をか

△たの 樂とよあり日神乃磐戸と出たまひて群神も成伸て

よとらふよ古語拾遺よみ、とらたの、みたの、ふたの、ふたの、ふたの、ふたの、
せり般成よむと通せり○日本紀に貴盛とよあり万葉集に貴在とたの、か
ん、よ、あ、は、樂、よ、と、通、せ、也、又、豫、も、樂、と、よ、あり

たのむ 頼特帖とよみまむむとわく、とら、け、手、祈、の、義、也、又、田、実、と、ら
出、る、辞、や、孟、子、少、と、豊、年、よ、多、頼、と、み、古、今、集、よ

秋風よあふたの、を、哀、け、は、我、所、を、か、り、ぬ、と、わ、り、と

秋風よあふたの、ぬ、也、伊、勢、物、語、よ

山嶽のわよ乃あふよむむひたのみ、つひとかなせふけ

とらふ、憑、よ、手、飲、と、ら、と、ら、と、ら、口、語、よ、多、く、托、の、と、ら、り、○八、朔、成、た、の、

乃、ま、と、ら、ふ、と、田、実、の、節、の、義、也、我、邦、乃、風、あ、れ、と、秋、実、の、成、熟、と、ら、け、ら、け、

て、新、家、と、ら、ま、や、ら、あ、ま、ふ、一、四、季、物、語、よ、小、松、帝、の、は、よ、り、始、り、と、

又、え、ふ、し、と、延、喜、式、に、は、才、ふ、の、ま、げ、國、史、と、と、ら、ね、一、公、事、根、源、よ、文、永、記

と、ら、て、建、長、乃、は、よ、り、始、り、と、ら、康、富、紀、よ、後、鳥、羽、院、の、ま、つ、と、ら、り、の、み

也、と、ら、周、太、曆、康、永、二、年、始、有、八、朔、之、贈、物、と、み、本、朝、通、監、よ、貞、和、元、年、八、月

朔、賀、佳、節、各、互、贈、物、と、ら、正、應、二、年、御、記、よ、今、日、家、の、の、ら、と、み、よ、て、れ、む

ら、物、を、ふ、け、り、始、り、と、ら、伊、勢、乃、多、く、あ、ま、り、り、ん、と、ら、え、也、と、み、二、水、記、よ、八

月、一、日、今、御、憑、之、御、禮、御、太、刀、進、上、と、ら、え、伊、勢、湯、殿、記、よ、と、八、月、一、日、伊、勢、乃、

年、の、の、ら、と、ら、ま、わ、ら、と、ら、也、堂、上、方、よ、り、太、刀、献、上、草、の、太、刀、也、將、軍、家、よ

り、馬、と、献、り、た、ま、し、將、軍、家、付、文、乃、御、祝、侍、り、て、諸、家、御、劔、御、馬、と

よて万葉集の段字次より全浙兵制は二次とふくびと訳せり○旅路
旅寐旅枕旅衣旅の舎に旅乃宿旅の如旅の如くより万葉集の客を
よむの訓也旅の客舎也と注せるより○ま本集

都いてつりくと旅をかくるするにむら(まのま)と

しむかどおのりてお成たびといふこといふ事也といふ易は旅之六
五不言旅程傳は五君位人君無旅則失位故不取君義と云ふ如○思ふ
子は旅成させしむ俗語の程子と旅は在て謙降柔和ふれ自保と
といふこと○万葉集

櫛と見ぐ屋中と掃いぐ松旅り君成役よとて

仙是也人の物(何)りるは三日の家(度)掃りてつゝ櫛と云ふこといふ
ある也とみへり○手火の万葉集より日本紀より秉炬と云ふ今も炬は幾
たひといふ也○足のたひの倭名抄は野人以鹿皮為半靴名曰草皮といふ鎌倉
年中行事は鎌倉殿くまりの草皮めれといふこといふ全浙兵制もかく云り
り軍用は貫と云ふと云ふ一物といふ世人常用と云ふより其制も云ふた

れと旧名次呼いよ本綿たひ今の製乃如る長岡三齋の母初て製寸三齋足
令より也今つおの襪子といふこと中山傳信録も襪と譯せり尼衣也と注
せり襪はも靴也つは音也つは音はれと云異なりと云は旅といふ物
物もたひといふ其名も昔は皆草と用わて女の暗は草草用お糸といふ
寛文延宝のはまありといふこと今足袋といふは丈双紙といふこと
み(ヤ)文の皮もといふは用い(か)と云ふこといふ九朝廷諸臣諸社神人足袋御免はけ
は着る正和二年記は足袋御免之事草襪年齢五旬以後可被免許但雖不及社
齡為病休者蒙御免可着白草煉草といふ

たひら 平と云ふ手紋の義也といふ俗は掌と云ふのひらといふ又おの平といふ

と掌のやといふ一説は田開くの義也といふ童子蒙頌韻も夷といふ

○今乃皇都平安城とたひといふ日本紀略は子來の民謳歎之輩異同辞
号曰平安京といふこといふ民より名け(徳)号の靈臺靈沼と美と等といふ吉記
古記と列て東有嚴神西仰猛靈敬神者加茂明神也猛靈者松尾靈社也依
二神之鎮護期万代之平安といふこと

り乃の日の池にやうにむくくさひなひく千世のつらきりや

○飛驒信濃の地名は何平といふものなり山坂の内は平地あり其村里とする
とてなり○平姓は桓武帝第五子葛原親王孫從五位下上總介高望王の始
平姓は賜りてよりあり

たびー 日本靈異記に礫とたびいといふありたびいといふと通じて飛礫の

名也貫之が白川大相亭春子日會序にまねたたびいといふありまねの千葉の君
より祈るに花のさうえといふ人のあはれをみよとみよ花を紙に紙をみよといふ
とたびいといふといふまね源氏にたびいといふまねに思ふありといふ類聚
よ山がつたびいといふまねもとも思ふを礫の謂也元輔家集に筑後にて大貳の
御門の善提子といふあり

みぢくくん玉乃光氏たのむくねむくたびいといふと
百姓はくくある説き右の草木を礫まてといふるあり物してまてト、
乃者といひ詞にむねるや

△たび 日本紀に賜字といふあり今たまふはたびといふ也○耳の齒珠といふ倭

名は耳珠とみたびといふあり又びくともあり○たびのより海に神相全
編に齒珠朝王者主財壽貼肉者富足といふ之太平記も耳のびくく磨く
たりけりといふなり○関東よて髪につとげたびといふ○湯水たび
くふといふも湛停也といふ○出羽よて水盛はといふ

たふ 左布の音也たふぬのといふも重言ありといふこれと信濃國伊奈出申
よらたふぬの楮の皮りて織て服し守或は袴布のまねる名もやといふ
又一説に津輕のまよといふ即ちたふぬの布也といふ○利未亞例に大布
と名け狼状乃ぬと者あり其名を獸といふて其手足成人よりまよ人の墓に
宛て人の尸を食ふといふなり○村よたふといふは櫛障の布也○堪といふあり
任といふは公任乃能成といふ長能の能任は史正義に堪也といふ白堪任といふ
連用と能通して耐といふは漢各の注に耐は堪也といふ又堪耐と連用を勝と同一
韻會に任猶判に枕立ありといふ皆たといふなりけり不耐不勝をたといふといふも
也といふにぬいといふも也けりといふなりといふぬいといふも決不禁といふも堅固に小使
といふなりといふも小便不禁といふ○源氏もたふまといふとみよといふ定家也

たふまきあまより後のかふまき梅しとさひうひなを

たふる 倒とあり侍と僵も同一靈異記と顛沛と訓と又躡とあり
博名抄ふ狂とありふもか乃顛倒とる言也たふまき彼よりいふ詞あり○倒
る所と土はくむとあり子誘い今昔物語より今俗くけと取て火折石
とむらつる○驚い獸乃死より人ふと狂死ふとにたり列仙傳と二君家有
驚者とみま中臣被ふとあふとみま或は瘧と訓と

たぶさ 日本紀と腕とあり手総の義後撰集とあつたぶさのけびつとい
ふ也○たぶさとるふと俗よりたぶ頭髻と日本紀とたぶさつと訓するの畧語也
鎌倉右大臣集とゆいめてふれたぶさのむらさねとあり

たふけ 嶺とのふ峠字ハ倭乃俗字也手向の神多く坂の嶺とまゝて越行人と
必とこれ成るをいたむけと將しくたふけといふ也といつ万葉集と
かゝるみとのふありけみまゝのたふけとまて妹のふらつ

たぶき 東鑑と田文と云々田地の文籍也神鳳抄と田文曰と引津國豊
嶋郡南々村あり社司の今西氏と田文といふとのありと紙のつくると一寸あり

たてよけい引てホ横四けいありて山川田畑墓原ふと横は各てあり其最初は
文治五年御檢注加納田畑取帳とあり前は垂水御杖檀坂とてあり封の内
よの教旨田不輪田ふとあり不輪田ハ一人受持て田と持とせざる田地の
てふる一〇拾芥抄田籍計と凡田以方六尺為一段廿六歩為一段頭一段為一町頭十
段為二町積廿六町為一里此六里為保々起從北行於南限於廿六條里起從西行
於東限廿六里町始良終乾但已上可隨國例と云々今後の制ふれい今よのせと三
十六町成路程の一里と云々と是より出

たぶて 万葉集とたぶてふと投越けつて天のふと諸の飛礫とらふ也今ほぶて
といふ

たぶく 神代紀の字より由貴とより皇代紀は貴盛とたのしむとたぶと
はともより催馬樂のあふたぶとつと樂とさそ也といふが通ふか一
万葉集ふはとたぶとらふとたぶとらふといふ

たぶさね 神代紀は積鼻とよみ新撰字鏡と積成ともより股塞の義也今も上総と此語を
より漢書は積鼻禪とありより積名は積鼻禪貫也貫西脚上繫腰中下當積鼻と

贖鼻ハ足の三里の上れ元處の名古わら制の物あり一ふや兼之記は依々木宇
治川と清江に裸ふありたふささむかひ成かるとも也今乃旅服引のたき
ふと一はぬふと一と一〇袖中枚よからのちと後ろよりふ引よきた
用おと一〇漢語抄よ松ととのふたふきたきと誇り〇たふと一ふとの相撲
ふとの時よ馬の手綱とて肌の手よて成いつたはふ乃將也西土よと兜
肚とて囊成造り前陸成掩ふ制あり

たふと一 新撰字鏡よ猖獗と訓せり自尊大よとる訓まふと一

たふと一 誑字とよめり誑と同一又詩經よ誑字もよめりふら及び也手術

すのふと一 およたふらうはくもえんも

△たふ 神代紀よ妙字成よめり和妙荒妙白妙抄妙ふと一ふ也感ふ堪て妙と贖
とるの辞也〇絹布乃名よいつる言事記万葉集祝詞ふとよ袴と一とあり日
本紀乃予よたふのく後と一ひ延喜式よ明細布照妙ふとみ古語拾遺よ
織布とありたふとよめり後世とよふあり〇万葉集枚よ白と也よ能く
ふと一よ白袴白細布とよめり一とよみ雪穂をたふのほとよみ敷白とよ

△たふと 浮ふよなり〇姓よ勝とよめり肌の訓成略と又堪よ同一〇たふ
妙ハ江口乃遊女也新言今集よんよ

△たふめく 枕多寄よはちあくれいよふとたふめく一
あふれとえりたふめくをぬ一

△たま 珠玉とよめり海よ出る珠と一山よ生る玉と一守令義解よ自然の
物と玉と一造作よ出る珠とせり〇後一條院長元七年八月よ祭主輔
親大神宮よ奉籠の時神前の松樹より碧玉一顆を獲り一奉を經記
百練抄日本紀畧よんよ〇明和九年の春紀列みのたふよ水手の妻出
産ぬ其生児乃左手握りて用る十日よ乃ひ湯あせ一時用るく手
中よ握り居る玉あて形三角色白く水精のめくし一光彩ありたふ七
分と一也波多氏親く見てあつ予よ誇りぬ〇攝州廣田の社乃珠ハ中よ劔
形あり諸社事よは是と神功皇后の如意珠と守蕉堅稿よと西宮劔珠絶世之
奇觀也とみよ〇言事記よ璆と訓せり兼名花よ球琳琅玕現瑠璃琬琰皆美
玉名也と一〇類聚雜要よ湯丸玉と一説文よ美金与玉同色者曰湯と一

万葉集の「手結」を「又倭文手纏」ともいふ。賤の「手纏」と同じ。○熊野玉置山荒祭神社の火神といふ岩屋。○「あまの地ちり」○「あまの貫」といふ大倉乃足の指と云ふと具也たぬとの條を「あまの貫」ともいふ。○「あまの貫」の雲井注とて「あまの貫」ともいふ。○「あまの貫」の雲井注とて「あまの貫」ともいふ。

たまひ 日本紀の「又吐」といふ倭名抄に「嘔吐」と訓せり。神代紀に「所嘔神」と速玉之男といふより出る詞也。○田舞の「大嘗祭」といふ延喜式に「あまの多治比氏の内舎人等」云々。倭人といふ今ハ「伊勢大神宮田植」も「田儻仕奉」といふ事儀式帳に「あまの貫」といふ。

たまひ 日本紀の「又吐」といふ倭名抄に「嘔吐」と訓せり。神代紀に「所嘔神」と速玉之男といふより出る詞也。○田舞の「大嘗祭」といふ延喜式に「あまの多治比氏の内舎人等」云々。倭人といふ今ハ「伊勢大神宮田植」も「田儻仕奉」といふ事儀式帳に「あまの貫」といふ。

源氏「たまひ」といふ。○土佐の西境に「たまひ」といふ。○土佐の西境に「たまひ」といふ。○土佐の西境に「たまひ」といふ。

たまひ 日本紀の「又吐」といふ倭名抄に「嘔吐」と訓せり。神代紀に「所嘔神」と速玉之男といふより出る詞也。○田舞の「大嘗祭」といふ延喜式に「あまの多治比氏の内舎人等」云々。倭人といふ今ハ「伊勢大神宮田植」も「田儻仕奉」といふ事儀式帳に「あまの貫」といふ。

たまひ 日本紀の「又吐」といふ倭名抄に「嘔吐」と訓せり。神代紀に「所嘔神」と速玉之男といふより出る詞也。○田舞の「大嘗祭」といふ延喜式に「あまの多治比氏の内舎人等」云々。倭人といふ今ハ「伊勢大神宮田植」も「田儻仕奉」といふ事儀式帳に「あまの貫」といふ。

たまひ 日本紀の「又吐」といふ倭名抄に「嘔吐」と訓せり。神代紀に「所嘔神」と速玉之男といふより出る詞也。○田舞の「大嘗祭」といふ延喜式に「あまの多治比氏の内舎人等」云々。倭人といふ今ハ「伊勢大神宮田植」も「田儻仕奉」といふ事儀式帳に「あまの貫」といふ。

たまひ 日本紀の「又吐」といふ倭名抄に「嘔吐」と訓せり。神代紀に「所嘔神」と速玉之男といふより出る詞也。○田舞の「大嘗祭」といふ延喜式に「あまの多治比氏の内舎人等」云々。倭人といふ今ハ「伊勢大神宮田植」も「田儻仕奉」といふ事儀式帳に「あまの貫」といふ。

たまひ 日本紀の「又吐」といふ倭名抄に「嘔吐」と訓せり。神代紀に「所嘔神」と速玉之男といふより出る詞也。○田舞の「大嘗祭」といふ延喜式に「あまの多治比氏の内舎人等」云々。倭人といふ今ハ「伊勢大神宮田植」も「田儻仕奉」といふ事儀式帳に「あまの貫」といふ。

又○古今集の玉のたれのこがれに瓶玉の出るかあるはしりてわまらあうこも
又小瓶よりしつみぬみぬとて後人こころみぬとて玉のたれかみぬ中よと
名てあるはりぬかみぬまぬまぬかみぬにこころみぬにこころみぬにありあけ
あとのふ風俗のやよりて古今のやもよりて○王岳命とて千満兩
珠と奉行やより起る藤連保の神号也と師時記にみたり苑後國高良玉東
神社是也石清水別當隆清説上高良武内也下高良玉岳也といふ

たまゆら 玉玲瓏の姿也万葉集玉玉響とて又玉とていふとよみ又玉ゆらとて
日の夕へくおをふといふたすとのま也と公任との説也喜撰式とて邂逅とて
らと云とてハ雲御抄やとてのまともみとて万葉集人のむやとて
やめとて玉ゆらとていふとて下句はけこの朝はこよをともといふとて
たまゆら せよ六の玉川とて多くゆめとていふ詞あり武藏多磨郡にあり此川の
水い玉をふして聯珠の如くといふ秋の拾遺集也陸奥野田の玉川ハ仙臺
と松島との間にあり泥川ぬれと水底より玉の如く泡かきりたりとて沸出といふ
秋の能因法師也山城堰手の玉川とて堰手の里玉水とていふ所あり秋の俊成也

近江野路の玉川の秋ハ俊頼朝臣也紀伊の玉川の高野山にあり秋ハ弘法大師
也攝津國ハ嶋上郡也秋ハ相摸也○顯照ハ水鏡玉川とていふ事其心せし
とていふとてハ井手の玉水とのいふ○帝王系圖諸門跡譜に玉川
宮ハ紀伊國伊都郡とて長慶院の太上天皇の時移御ありとて所也
たまぐ 神代紀玉籤とて賢木玉串といふと大嘗會といふ水

久勅使記にみく大神宮式ハ賢木の枝に木綿付とて成玉串といふ
内宮年中行事ハ枝毎に木綿と結付とて玉串の系ありともいふ
まゝ伊勢といふ名也大神宮式ハ着袿玉串あり年中行事ハ木綿糸袋所
帶神懸也といふとて○一説ハ玉串ハ上代ハ玉と著て進む故とていふハ万
葉集の竹玉とていふとて後世ハ木綿着る成玉串といふ絹布と着る成
幣串といふとて又轉して紙を切て着る事といふとて○神宮ハ玉串行
事所あり官司称宜の玉串と取の所也玉串御門といふと俗称也諸祭ハ官司称宜
の持たる玉串物忌父等取てハ御門の柱下に納る也○万葉集ハ玉櫛の神といふ
んとよめるハ髪成とて勢たるふり原氏也

こふう者成今よほふまの玉の波ぐくと神さびけり

たまがき 神武紀に玉牆内國と云ふ玉のやめてし詞瑞垣と云同

よて玉垣の御津とも属りうされと瑞垣と珠垣といふれり神祇本源之内

又神宮小内乃玉垣御門と云ふ今玉串御門と云ふ○聖武紀玉垣句

頃官に紀伊那賀郡ふあり○伊勢國河曲郡玉垣村あり式に弥都加伎神

社あり是也神鳳校玉垣御厨と云ふ今此村玉垣厨千人衆といふありて外

宮禮垣家と通連と云ふと鞠乃御厨と云ふ此村より鞠式制一諸方一出と

小勢と云ふ村と岳坂村と二村とありて他村に製すは運上と云ふと

と也と云ふ

たまのど 玉緒と云ふ玉を貫の緒也○命の幸ふらふと靈乃緒也玉の緒と絶

はと云ふの故に新古今集は百首の故の中は忠孝と云ふも流のうと云ふ

これいふせんといふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

たる也万葉集も玉蔓のけぬ時ふくとよあり○八雲御抄玉髪老敷乃
 事ありと宣了○仙道抄よまうづゝの付の纏也女よたよとらつ○後撰
 集ふらつひとまうづゝとよみ勅撰集よ柳の糸とよめつゝもみかづゝよま
 る成やめてまわづゝとよめ也○江次第よ齋王著玉髪依未成人不可上髪
 軟とらつひ女の髪とよめ也とらつひと万葉集よ歌とつゝる懸の糸也轉とら
 也又花髪成もつゝ○面影とつけら伊勢物語よもこ懸の糸も満向とつ
 くる也○葛も実あれ玉葛ともつゝ又まわめてつゝ谷せつゝもみかづゝとら
 かうつゝとらつゝ是也毛詩よ葛之覃兮旋干中谷維葉萋萋とらつゝ白續後拾遺集
 ふいふうづゝとらつゝ面わけてよめら通とらつゝとらつゝ永正記よ正殿室殿御垣ホ
 よ生かた玉葛ハ掃退けらる也とらつゝ○貝よ玉うづゝとらつゝ辛螺の殻とら
 至てつゝとらつゝ

たまらうゝ 菅家万葉集よ玉桂とて月の吳名とせら秋三首ありとらつゝこれよ
 よめらつゝとらつゝ

たまらうゝ 万葉集よ春三月三日召侍從堅子王臣等令侍於内裏之東屋垣下則

賜玉簪肆宴と云一まろく玉簪かりと鎌麻呂ともみん地膚とらつゝ
 魚一本草おも玉簪玉帯の名あり今らふものハ管根州の莖とらつゝ
 一とらつゝ又一種乃州の名おもつゝこの草州滿盧也とらつゝ○俊頼口傳よ
 玉簪とい著とらつゝ太に子日の松とらつゝ具とらつゝ玉簪よ作りて初子日よ蚕か
 ふとらつゝとらつゝ玉葉集よ

玉簪初子のまゆ成とらつゝ君成といとらつゝ小倉すて

南都東大寺正倉院よ子日鋤及玉簪ありて其圖成これハ別よりり
 体也是古一帝王躬耕后妃親蚕の事とらつゝとらつゝ万葉集の予よ蛇と志賀
 寺の上人の事成世とらつゝとらつゝとらつゝ

たまらうゝ 魂結の糸伊勢物語の糸とらつゝも鎮魂祭よりとらつゝ詞あり
 神祇官乃ハ神殿成神皇系圖よ天皇鎮魂八神とらつゝ三代實録よ偷兒開
 神祇官西院盜取主上結御魂緒とらつゝとらつゝ

たまらうゝ 玉手襪也玉ハ称美の詞一説よ万葉集よ珠手次ともとらつゝたまた
 ハ手間の糸とらつゝとらつゝ○畝火山の枕詞とらつゝ畝火と宋女子通りとらつゝ也

その事乃起つて名禁紀より又采女の子種と多るなり天武紀より
あつ世中のまたとれあるとよあるの中くまかけると苦いとらる也と定家
の
説也

たまねり伝 内よりよは属けりる松詞也又内といへてもまねつけよめり秋

日本紀に珠城張の事とらりてんりて大内成らふぬア一して万葉集よまに

る吾山のうふとよめり褒辞みつて儀式帳ふみまらる儀文ももるり○万葉集

は靈射内限とまら注は瞻浮例人壽一百二十年と謂也とらる魂極の事は特

らすといふよて幾世とつりり玉割春とある成りて顯昭法師の説は練杖のま

とまあらとらふ事よぬゆらまらるいかならん

たまらとらふ 顯昭説はたまは靈也とらる給ふ也魂と賜ふ神ありとらりて

説ふらとらふ事よの事也とらり善神の枕詞よとらりやふととらりて

たまあらぬのまらり 舊事紀令集解よとら鎮魂祭法らり十一月申寅日

よりり令義解は召復離遊之魂魄令鎮身體之中府故曰鎮魂とらる祝詞

小御座所は令御坐給とあらと此義也古語拾遺よ鎮魂之儀者天鈿女命之

遺跡則御巫之職應任舊氏とらる也其儀式は江次第薩武記等よらり

○江次第鎮魂祭の注は宇麻志麻治命十種寶振之返死縁也とあら江

氏のか注よていふ一一條禪閣兼良公の注あるより松下見林の説よらり

とらるん舊事紀よ本はとらるんと磐余彦尊元年十一月庚寅乃説は取用か

して今乃舊事紀の十室の説も古語拾遺よと載せは續日本紀以下の由よ

引津ふらとらり

△たみ 民とらりり四民の内よけて農と松とらる田人の事田人の古語拾遺よらる

又田部の名也景行天皇の時始と田部と再一たまよ日本紀よらる倭名抄

諸國の名もとらるん○國人をくたららみとららみまらる後嵯峨天皇

乃御諱成避とらるん

たみのかまど 民戸よらら幾烟とららる幸延喜式よららり○さるさるのやと

とらるの事に徳天皇の御製あるより一とららる傳言事談よとら載はる

宗尊親王正筆の日本紀竟宴和歌集仁徳天皇成よみまゝ時平大臣の弁

たうどの乃りりてつれと煙の民のかちやん今もあゆみ
とるいんひとて謬付せらぬといふ

△たむ 和名抄に採法よあり以又屈申木也字亦作燻と注せりたたることら
ゆる及む也○万葉集に舟とてたむふといつりさきえくらあて運轉等の
字とよあり又手回とてくたるといふも同義也○又天とてつらつてける
天雁の義也といふ○新撰字鏡に雁とよありとて山の畧なり○俗にたん
とあるふといふ多字れ也

たむろ 屯字とよみ日本紀に部字とよあり又隊字黨字とたむるとよありと
義同し其手くよむかり集る意とて日本紀に才數群とたむらありと
よあり○屯の圃に奥列栗原郡あり坂上田村麻呂蝦夷征せり時代に屯
とていふその後源頼義の清原武則に會せり所也○田村に續日本紀に
奈良京田村の里といふ也

たむけ 万葉集に祈字幣字手祭字ふと成よあり手向ともあり新撰
万葉集に手酌とよむみてくろの左右のよとて捧け惜りとの故といふとらつ又
多く旅行と祈るもよらつとて旅行乃をたむけとて古今集の序ふも遠
坂山手向旅行とてくろいり又万葉集にこしらむけよたら
てとて是も本綿疊手向の山とよありも相坂山成指とてふらふら都
より近江よかよふは宇治川成渡りてあまの糸とらふら山科乃い
くくのりよふとて相坂とてぬらう万葉集の長をよむ也○手向山と
とらら名成ゆらり大和也奈良山のとむけと指ぬら菅家のけくひぬ
さもぬあつと手向山とてみたまも取敢とも向るもあけけ移つ也菅公
危從雲林院不勝感歎聊叙所觀詩序ふと供奉無物唯花色與鳥聲舞
謝有誠唯至心與誓首而已と去たまひぬ又むに誠の乃よかむひふの
祚詠も同一授りまゝ神徳乃言は仰くといふ

万葉集十二卷に腰句ゆたくとらつとて心得く貫之

紅雲次とむかひ折るるをいふ向の山は林やまろしん

たんだく 拱とあり手抱たむかひの茶万葉集よもよしとて身伏抱たむかひ也音便よてた

たむかひて 日本紀よ徒手徒行をとりあり手空たむかひての茶あり空たむかひていかりて

たむかひ 神代紀よ甜酒と訓せり今俗らて酒の甘口たむかひ一白詩よ大嫌甜酒と

嘗會式の多明酒多明米ふととけ茶あり一めつ及む倭名抄よ醱たむかひとて酒と

たむかひく 短尺とあり尺ハ尺素の茶也又たむかひとて短冊とて

頼長公の日記よ鳥羽の法皇より官女のたむかひたむかひて下学集

よ短籍とてせり日本紀よ短籍たむかひのりやぐと訓せり国史天平二年よ正月御

大極殿宴令探短籍書以仁義禮智信五字隨其字而賜物とて又擬階

奏よとあり北山抄よ四月七日奏成選短冊事とて定考よも一人取短冊管と

とて公事根源よ二月の別見乃時の成選短冊とあり又短尺申文といふあ

とてもありあ字のわくたむかひ一荒短冊といふや雲圖抄よ小短冊袖

各二字也同昏よる白○秋の用とみれるは後のやたむかひ一拾玉集よ肩に短冊

とてて手抄載たむかひ其やたむかひも短冊とあり一或説よ嘉曆年中ハ二

條家の為世と頼阿法師と相談たむかひ式とてとてとて○よみ手抄載の枝

よけくるハ短冊たむかひ内四折よて結たむかひなり也とて○短冊切といふ

五山の詩會の時乃詩とて南禅寺傳長老の短冊切の繪あり

たむかひのたむかひ 倭名抄よ道神とあり唐韻よ禱道上祭一云道神也とて又朝

野群載よ出京関問奉幣道神事とて三代實録よ越中国玉手向神とて又

之より末木集よ

る居よ相坂山のさういふるよ向の祓よあがいませ

△ため 爲字法より去声とす與とよむハ詩詞家の事ありといふ佛經より
一爲所所以也とも住マラトク真名伊勢物語ハ故字とあり○佛足石の
子のため成くといふ○龜トにくめこのハ詞ハ頭昭説のため人あり五
兆の其一也といふ師時乃事

たけりひかひの糸乃きりふきつたためひひとくせそくひき
今と期せしめて相合ふる事成たをあらといふ

ため一 様字例字を成りたりは撰集ハ花のため一ふといふ花の様

躰といふ○日本紀ハ本字とあり俗ハ事のみなるといふ是也古今集も

千歳のため一君とく一めといふ○神宝本様便書史往々之ゆふ成檢

ころ後也といふ後ハ神宝法作奉奉○物と試み成りめといふ詞も同義

一試劔のため一といふ

ためらふ 万葉集ハ猶豫能徊ふ成りたりたゆまるも一源氏の抄ハ白氏

文集の校行ともありといふ倭註切韻ハ強健とありみ埃囊抄ハ踉蹌とあり

○飛驒少てハ俗ハ行と送る辞といふ

ためつもの 貞觀儀式ハ多米都物とて献物と別に出せり大嘗會よりハ語あり

延喜式ハ多明酒波多明料理屋ふとてとてこれハ供神の子成献物といふ給賜

乃料と多明都物とらやるといふ

△たと 頭昭説ハ魚成くむお也といふ攪細といふたさる事也といふひださるとい

て俊頼

かひの史のやくけよるまはまをたりといひく鯉といふ人

○口語より賜ハの事也といふ中山傳信録ハ衆討成たりと記せり○樹といふ

ハ月桂也といふ或ハたをふりといふ又ハはといふ玉の美実といて名成

得るなる一西州ハそれたがといふつのみといふ線香の用といふ山

城といふの木長門といふの木西國といふの木伊豫といふが土佐といふの木

上總といふは伊豆といふ思ふといふ大島といふ赤実といふの果あり又くといふ

はも葉櫛樟に似く香氣あり花といふ一又藪肉桂と稱するものと皆同種

也藥肆の松浦肉桂卷肉桂咬嚼吧肉桂もまて此物ありといふ○帝衣く

用く衣といふと呼ぶ

帶字成より齒の帯を一万余集より其のちりり帯と云ふは俗にまたらふと云ふらふらふ也詩經に匪伊齒之帶則有餘と云ふ

光孝帝の三子成太郎二即三即と稱を又源賴義の三子と成二即三即と稱を滋野貞主と成二と稱一在原業平成在立と稱も同唐太宗の高祖乃二男あり成りて二即一玄宗の睿宗の三男あり成りて三即一とする如

又太郎二即三即と字と稱する事東鑑にも云ふ事あり○伊勢国なる村の太郎生と云ふ神鳳城の伊賀に入て多良牟と云ふ岑と成りて伊賀也

名張郡比奈知村國津大明神の社地也
なごみ 倭名鉞の盟と云ふ中山傳信録に湯盆と記せりてあまたある手洗の事也椽手洗小手洗類聚雜要にもみだりて盥盤也洗のたごみなるはの角あり角盤也といふ新撰六帖に

老はけふものごとくはれ給ぬのたごみ水よりかよ面かけ
今足成あり器とたごみと云ふ器とてたごみと云ふは後世の詞なり
たごみと南都また陸奥に洗足なら因幡にたごみと云ふ

たごちの 万余集に齒乳根と云ふ母の枕詞といふ母成はやくよめりといふ万余集よりと云ふなり○たごち成たごちめは後世父母成ふといふ也神代紀に父母乃名に足摩乳手摩乳あり乳養撫育乃成也

△たご 台事記にたごちけり成而在神理と云ふ万余集に成りて成有と云ふ起り成起有と云ふてあまた也伊勢物語源氏にたごちと云ふとありてあまたの成也○慧言問答と音とを云ふと云ふかんと云ふとよむの成とあまた也○人よ瑕成らふと云ふ成成らふと云ふをたごちと云ふとありてあまたの成なりけり齒の字ありて○馬の病と云ふは倭名鉞に驚字成より齒の成なり新撰字鏡に疣と云ふあり史記に馬驚不行と云ふなり○幾人成りたり二人と云ふたり三人と云ふなりと云ふ成の成なり○鳥と云ふは万余集よりと云ふ○播紳家傳東乃時太刀成佩るに前よりと云ふ物あり古馬よめ成り成り成り久太刀乃柄と云ふなり一幸也と云ふ成の成なり

△たご 足とよめりらるるれりて用けり○齒も足と通ずり○格と酒と

岳の茶^茶一搯と同一より後俗^俗字とも用^用る^ると搯^搯ハ^ハ同^同一酒器^{酒器}あり
あ^あの^の二合^{二合}の^のも^も成^成る^る也倭名^{倭名}鉄^鉄の^の无^无和^和名^名俗^俗称^称去^去声^声と^とる^る朝^朝鮮^鮮語^語も
泰^泰留^留と^とる^る○為^為字^字と^とる^るとある^{ある}の^の茶^茶と^と同^同也^也字^字の^の語^語未^未だ^だと^と約^約言^言す
し^して^てる^るか^かけ^ける^ると^と皆^皆同^同一^一た^たいて^て河^河及^及た^た也

たふひ 岳氷也俗^俗に^には^はつ^つと^とる^る也今^今と^と仙^仙臺^臺の^の茶^茶と^と同^同一^一古^古事^事記^記カ^カ競^競の^の手
よ^よ立^立氷^氷と^とい^いつ^つも^も是^是と^とい^いふ^ふ○岳^岳穂^穂の^の水^水と^とい^いふ^ふ茶^茶と^と同^同一^一

△たは 誰^誰を^をよ^よめ^める^る俗^俗に^にた^たは^はと^とい^いふ^ふて^てら^らし^し又^又轉^轉訛^訛と^とい^いふ^ふも^もた^たは^はと^とい^いふ^ふ孰^孰と^と晴^晴
と^と同^同一^一○語^語と^とい^いふ^ふ茶^茶と^と同^同一^一あり○た^たは^はと^とい^いふ^ふの^の社^社ハ^ハ伊^伊賀^賀國^國伊^伊賀^賀郡^郡あり

哀^哀其^其社^社と^と同^同一^一市^市部^部村^村あり^{あり}風^風土^土記^記ハ^ハ岳^岳國^國社^社大^大物^物主^主神^神也^也と^とる^る藤^藤原^原忠^忠家^家
し^しの^のは^はち^ちに^にも^も三^三輪^輪の^の社^社と^とい^いふ^ふ跡^跡は^はし^しの^の社^社の^のト^トか^かけ

たはとれ 源^源氏^氏ハ^ハも^も誰^誰時^時の^の茶^茶也^也俗^俗に^にた^たは^はと^とい^いふ^ふと^と昏^昏と^とい^いふ^ふ又^又曉^曉も^もい^いふ^ふと^と小^小所^所
ナ^ナキ^キ也

曉^曉乃^乃た^たれ^れ時^時星^星と^と山^山の^の端^端と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふか^かつ^つふ^ふせ^せぬ^ぬ也^也
世^世ハ^ハ曉^曉の^の明^明星^星と^とい^いふ^ふ一^一

△たろ

△たと 古^古事^事記^記ハ^ハ山^山多^多和^和と^とい^いふ^ふ山^山の^のた^たと^とい^いふ^ふ石^石炭^炭と^とい^いふ^ふ也^也今^今と^と西^西國^國ハ^ハい^いま
く^くら^ら美^美濃^濃の^の山^山中^中と^とい^いふ^ふ絶^絶頂^頂の^の平^平ら^らと^とい^いふ^ふ信^信濃^濃と^と見^見嶺^嶺河^河と^とい^いふ^ふ
も^もた^たら^らみ^みの^の略^略也^也大^大和^和山^山も^も是^是の^のた^たと^とい^いふ^ふ不^不河^河と^とい^いふ^ふ山^山た^たと^とい^いふ^ふ水^水と^とい^いふ^ふ
め^めり○姓^姓ハ^ハ大^大多^多和^和あり^{あり}大^大多^多和^和三^三郎^郎義^義久^久ハ^ハ三^三浦^浦義^義明^明の^の子^子也^也○大^大和^和より^{より}伊^伊賀^賀伊^伊
賀^賀郡^郡治^治田^田と^と通^通る^る徑^徑と^と大^大多^多和^和越^越と^とい^いふ^ふ

たはむ 撓^撓字^字ハ^ハよ^よめ^める^る新^新撰^撰字^字鏡^鏡ハ^ハ割^割と^とい^いふ^ふ手^手輪^輪と^とい^いふ^ふ也^也孟^孟子^子の^の膚^膚不^不
撓^撓と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ誤^誤也^也○万^万葉^葉集^集ハ^ハた^たは^はと^とい^いふ^ふと^と枝^枝と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ
と^とい^いふ^ふ

たはら 俵^俵と^とい^いふ^ふ田^田藁^藁の^の茶^茶也^也今^今俵^俵子^子と^とい^いふ^ふ俵^俵の^の字^字ハ^ハ宋^宋史^史ハ^ハ定^定俵^俵馬^馬歲^歲額^額
と^とい^いふ^ふ文^文獻^獻通^通考^考治^治平^平全^全書^書ハ^ハい^いふ^ふ也^也明^明律^律ハ^ハ俵^俵與^與と^とい^いふ^ふ割^割つ^つけ^けら^られ^れと^とい^いふ^ふ類^類
書^書纂^纂要^要賞^賞賜^賜部^部ハ^ハ分^分俵^俵俵^俵散^散也^也と^とい^いふ^ふ六^六書^書故^故ハ^ハ分^分俵^俵也^也と^とい^いふ^ふ今^今と^と米^米囊^囊と^と賞^賞
賜^賜と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ也^也延^延喜^喜式^式ハ^ハ公^公私^私運^運米^米五^五斗^斗為^為俵^俵と^とい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ其^其茶^茶は^は
今^今諸^諸列^列ハ^ハ五^五斗^斗俵^俵四^四斗^斗俵^俵三^三斗^斗三^三升^升俵^俵ホ^ホの^の不^不同^同あり○藤^藤原^原秀^秀卿^卿を^を俵^俵藤^藤太^太と^とい^いふ

ハ不經の俗説也本居大和の田原也といひ延喜十八年十月二十一日斬白蛇龍
神與十種珍室と蒲生系圖より三上山の契松以斬とせよといふも非なり
されし秀吉公すて君されし時蒲生氏々誕生の賀よ秀々の矢の根と献と三歳
より早世せりハ矢の根妙心寺に収むといふ

△たぬ 万葉集に田井と云り山の下田の田井はつよす唯田のまよはしよみよみよ
倭名抄に名よと田井と云り或ハ田居とも云りよそめあふ也といふ軍防令に
防人とも田よつとと蒞會といふも同し田居とい稱と刈乾て暫くぬる事といふま
よ田まよみよ居也○姓よとらう○田中乃井戸といふも同義あるもや

嘆よけり苗代水よかけんて田中の井戸乃やまよたのを

たぬや 對登と云り伊勢物語よ西の對ふと云り主殿よ對とるの義也對の
屋造よハ角木ハ入と孤戸なりといふ○忌日の前夜よらふも速夜と云り

たぬぢ 對治の字梵よと多くと云り又退治もや

たぬやう 對揚字書經よと云り山城記よ城南寺競馬對揚誰人哉といふ
城南寺ハ山城紀伊郡竹田村の安樂壽院也又中島村城南神の社也社の東北よ

真幡寸辻あれハ式よ所謂真幡寸神社二座是也令集解真幡寸神社加茂別雷
神之轟神也といふ

△たぬ

△たぬやい 弓懸よらふも手覆の義也鞍覆の左右乃端の垂とる所はつよ
密覆乃義也といふ

たぬがひ 光仁紀の詔よと多意多比之美能母志美と云り多字ハ能
字の上よあると云り誤て意字の上よ置也といふと穩一み頼一みの義也



倭訓聚前編十四終



